

泉鏡花

縷紅新草

正規表現版・藪野直史オリジナル注附

「やぶちゃん注」本篇は昭和一四（一九三九）年七月発行の『中央公論』に初出し、没後の同年九月に中央公論社から刊行された作品集「薄紅梅」に所収された。

本「縷紅新草」は鏡花生前に発表された最後の小説であった。病苦を押し、夫人すずさんの心配を退けて執筆したのが、本篇であったのである。翌月八月に入って、病勢、いや増し、昭和十四年九月七日午前二時四十五分、癌性肺腫瘍のため、鏡花は白玉楼中の人となった。現在の私と同じ満六十五歳であった。

標題中の「縷紅草」というのは、ナス目ヒルガオ科サツマイモ属ルコウソウ *Ipomoea quamoclit* で（熱帯アメリカ原産の蔓性の一年草で、アサガオなどと同じように、冬になって気温が下がると枯れてしまうため、園芸では春蒔きの一年草として扱われる。葉は深く切れ込んで羽状を成し、互生する。夏、漏斗状で、先が星形をした二センチメートルほどの赤い花を開く。他に白・赤・桃色のものもある）、それに鏡花が「新」を添えて、独自のイメージの幻花としたものである。[学名のグーグル画像検索](#)をリンクさせておく。

さて、ここで本篇に対する戦前と戦後の大家による二つの批評を紹介しておく。

まず、岩波旧全集の巻二十四（一九七六年刊）の村松定孝氏の手に成る「作品解題」によれば、昭和一四（一九三九）年九月に『小林秀雄氏が「泉鏡花の死其他」（昭和一五・二『文學2』創元社刊）で鏡花を追悼する形で本作に觸れ、「言葉といふものを扱ふ比類のない手腕」を挙げ、「現代小説家はいろいろな點で鏡花世界から逃れ得てはゐても、鏡花の魂からは逃れられるものだらうか。」との疑問を投げかけた上で、鏡花は作家に關する最も難解な問題に於いて徹底し、その問題が、「兎も角、小説家と言はれる人々の間では勿論、詩人にも稀有な純粹な形で現れている」と評價している』とある。

私は批評家としての小林が嫌いであるが、この評は素直に腑に落ちる。

その後、村松氏は戦後の三島由紀夫の優れた評を引用されておられるが、これは私の所持する三島の中公文庫版「文章読本」（一九九四年十五版）から引く。但し、この引用は本篇の内容のネタバレとなっているので、本篇を未読の方は、気になるのであれば、以下、最後の私のまとめの部分のみ（太字にした）を読まれ、他は読後にお読みになるのがよからうかと存ずる。

初出は昭和四四（一九六九）年一月中央公論社刊のシリーズ『日本の文学』第四卷「尾崎紅葉・泉鏡花」の解説の最後の部分の以下である。『「縷紅新草」は、昼間の空にうかんだ燈籠のように、清澄で、艶やかで、細緻で、いささかも土の汚れをつけず、しかもまだ灯ともされない、何かそれ自体無意味にちかいような果敢なさの詩である。これも亦、能に似た気分を持った作品で』（これより前の部分で三島は鏡花の名作「高野聖」について述べる中で、同作の『成功の一つの理由を、能のワキ僧を思わせる旅僧の物語という、枠組のせいではないかと考えている』と述べていることを指す）、『三十年前の心中事件は思い出の彼方へ融け入り、今、小春日和の午後の展墓にいそぐ美女と初老の男の心に、事件は幽霊の蜻蛉によって、淡々とよみがえってくる。そして現実に幽霊は、小説の末尾で姿を現わすのであるが、それも遠景として点綴されるだけである。お米には晴れやかな年増の美しさが匂い、「をちさん」には一生つづく悔恨が燻くもっている』。『私はこういう明るい詩を、鏡花がその晩年、しかも戦争の影が重くのしかかる時代に書いたことに、一つの遺書の意味を見ずにはいられない。鏡花の一生の仕事はこのような淡い美しい白昼夢にすぎなかったかもしれないが、白昼夢が現実よりも永く生きのことはどういうことなのか。人は、時代を超えるのは作家の苦悩だけだと思い込んではいはしないだろうか。言葉だけを信じて困難な時代を生き抜いてきた作家が、老いに臨んで、永遠不朽の女性美の神秘を、白昼の幻想の裡に垣間かいま見た詩は、近代日本の同じく困苦と夢想到に充ちた歴史の中で何を意味したであろうか。私は世阿弥が理想としたあの真の花を思い出すのである。「これ真に得たりし花なるが故に、能は、枝葉も少く、老木になるまで、花は散らで残りしなり。これ、眼のあたり、老骨に残りし花の証あかしなり」（風姿花伝）』とある。

思想家としての三島は好きになれないが、この冒頭、『「縷紅新草」は、昼間の空にうかんだ燈籠のように、清澄で、艶やかで、細緻で、いささかも土の汚れをつけず、しかもまだ灯ともされない、何かそれ自体無意味にちかいような果敢なさの詩である』と評し、エンディングに世阿弥の「風姿花伝」の憎い一節を用いたところは、彼の作家としての鋭い読み取りを感ずる。

底本は岩波旧全集（巻二十四・一九四〇年刊）に拠った。但し、加工データとして嘗つて大変お世話になった（[私の鏡花の俳句集のこちら](#)）のものは、サイト主が贈って下さった

ものである) サイト「鏡花花鏡」で公開されていたもの(記憶では春陽堂版全集底本で、ルビに相違があるようであり、本文の異同もありそうである)を使用させて戴いた。ここに御礼申し上げます。

踊り字「く」「ぐ」は生理的に嫌いなので、正字化したが、その他の表示表記はルビに至るまでそのまま再現してある。本作の映像上に重要な「燈」と「灯」は混在し、鏡花独自の厳密な使い分けがなされているように私には感じられる。リーダー数も三点・六点・十二点・二十四点が混在する。

各段落末或いは適切なシークエンスの最後にポイント落ちで注をストイックに附した(注が長くなるものは、なるべく切れのいいところに配した)。一つの注で、複数、注したのもあるので、引き挙げた当該句の箇所を太字で示した。最後の博物誌的な注のみ同ポイントとした。

而して早速だが、冒頭の詩篇のフライング注を以下に示しておく。「やぶちゃん注」「かやつり草」^{ぐさ} 単子葉植物綱イネ目カヤツリグサ科カヤツリグサ属カヤツリグサ *Cyperus microiria*。一年草。荒地や路傍に普通に見られる。茎は高さ三十〜五十センチメートルの三稜形で、一株から数本が出る。葉は数枚、細長い線形で根生する。夏から秋にかけて、茎頂に三〜五個の葉状の包葉を出し、数本の複穂状花序を生じ、その先端に数個の小穂が密生する。小穂は黄褐色の線形で二十個ほどの花が二列に並ぶ。鱗片は広倒卵形で一・五ミリメートルほどあり、実は鱗片より少し短く一ミリメートルほど。和名は、茎を両端から裂くと、四本に分れ、その形を蚊帳^{かや}に見立てたものである。同属種チャガヤツリ *Cyperus amuricus* は本種に似るが、花序が枝分れせず、また小穂の数が多くて褐色をなす点で異なる(「ブリタニカ国際大百科事典」に拠る。[グーグル画像検索「カヤツリグサ Cyperus microiria」](#)をリンクさせておく)。

「すきや明石^{あかし}」の「すきや」は「透綾」(「すきあや」の音変化)で、透けて見えるような薄く、さらりとした絹織物を指す。本来は縦糸に絹糸、横糸に苧麻(ちよま)イバラ目イラクサ科カラムシ属ナンバンカラムシ変種カラムシ *Boehmeria nivea* var. *nipponivea*。原野にみられ、高さ一〜二メートル。茎は木質、葉は広卵形で先が尖っていて裏が白い。夏に淡緑色の小花を穂状につける。茎から繊維をとって織物にする。真麻^{まお}とも呼ぶ)を使ったが、現在では縦糸・横糸とも絹糸を使う。夏の女性用の着尺^{きじやく}で、「絹上布^{きぬじょうふ}」の他、「越後透綾^{えちごすきや}」という呼称もある。而して「すきや明石^{あかしちぢみ}」であるが、実はこれは、透綾類の中で、最も人気のあったものが、京都西陣が扱い、全国的に知れ渡った「明石縮^{あかしちぢみ}」という商品名柄であったのである。この命名は、ちょっと複雑で、新潟県十日町市にある「[きもの絵巻館](#)」[公式サイト](#)内の「[明石ちぢみ](#)」によれば、今から四百年『ほど前、播州明石の船大工の娘・お菊によって「かんなくず」をヒント

に考案された』のが、「明石縮」であった『といわれて』おり、菊岡沾涼せんにりやうの「本朝俗諺誌」（延享三（一七四六）年板行）に「明石縮は」「小倉の名産なり」という『記述が見られるように、明石藩主の小笠原氏が豊前小倉に国替えとなり、小倉でも生産されていた』たとある。『享保年間』に刊行された『「万金産業袋」に『たて絹糸、横もめんいにて、尤もよくうつくしく縮たる物也。』とあり、もともとは、経緯たてよじとも木綿であ』ったもの『が、苧おと絹の交織が生まれ（苧縮）、やがて経緯とも絹糸になり、「明石本縮」と呼ばれた歴史もあ』るとある『。』そして、明治』二〇（一九八七）『年頃、新潟県柏崎町の越後縮問屋・洲崎栄助が、西陣の織物業者が「明石ちぢみ」を研究しているのを見て、西陣より湿度が高く、越後縮以来の強撚糸の優れた技術を持つ十日町が織るのに適していると考え、十日町の機業家「米忠」の佐藤善次郎に裂見本を見せて研究を進めたのが、「十日町明石ちぢみ」の始まりで』あったとある。【二〇二二年

七月十六日 藪野直史】

縷紅新草

一

あれあれ見たか、

あれ見たか。

二つ蜻蛉が草の葉に、

かやつり草に宿をかり、

人目しのぶと思へども、

羽はうすものかくされぬ、

すきや明石に緋ちりめん、

肌のしろさも浅ましや、

白い絹地の赤蜻蛉。

雪にもみぢとあざむけど、

世間稻妻、目が光る。

あれあれ見たか、

あれ見たか。

「をちさん——其の提灯……」

「あゝ、提灯……」

唯今、午後二時半ごろ。

「私を持ちませう、磴に打撞りますわ。」

一肩上に立つた、其の肩も裳も、嫋な三十ばかりの女房が、白い手を差向けた。

お米といつて、これは其のをちさん、辻町糸七——の従姉で、一昨年世を去つたお京の

娘で、土地に老舗の塗師屋なにがしの妻女である。「やぶちゃん注」：「塗師屋」漆器を製造する職人。」

撫でつけの水々しく利いた、おとなしい、静な圓髻で、頸脚がすつきりして居る。雪國の冬だけれども、天氣は好し、小春日和だから、コオトも着ないで、着衣のお召しで包むも惜しい、色の清く白いのが、片手に、お京——その母の墓へ手向ける、小菊の黄菊と白菊と、あれは佗しくて、こちこちと寂しいが、土地がら、今時は、お定りの俗に稱ふる坊さん花、薊の軟いやうな樺紫の小鶏頭を、一束にして添へたのと、一寸色紙の二本たばねの線香、一錢蠟燭を添へて持った、片手を伸のべて、「その提灯を」といつたのである。「やぶちゃん注」：「雪國の冬だけれども、天氣は好し、小春日和だから」作品内の舞台と現時制を確認すると、

「雪國」から推理される通り、鏡花の郷里金沢市街で（後注で詳しく考証しておいた、後でロケーション・モデルである卯辰山の描写の中で、そこが既に紅葉していることから、「冬」「小春日和」に紅葉で、これは十一月中旬から下旬に限定出来ると考える。「こちこち」と硬い感じで何となく潤いがないことを言っている。私も実は墓前の供え物

にする黄菊や白菊は少年の頃から、妙に瑞々しさのない「硬い感じ」がして好きになれずにいるので、甚だ腑に落ちるのである。「坊さん花、薊の軟いやうな樺紫の小鶏頭」はナデシコ目ヒユ科ケイトウ属ケイトウ *Celosia argentea* としておく。ウィキペディアの「ケイトウ」によれば、『原産地はアジア、アフリカの熱帯地方と推定され、

日本には奈良時代に中国を経由して渡来した』とあり、そこでは、花期を五月から十月頃とあるのだが、NEA 出版の「みんなの趣味の園芸」を見ると、七月から十一月とするので問題ない。同当該ウィキペディアには、品種として「キノケイトウ」が挙がっており、これは『ミニケイトウ』『とも言われ、矮化剤を使』って、『成長を止めてあり』『普通のケイトウの大きさには成長しない。比較的に園芸店で安価に手に入れられる』とあり、「小鶏頭」との一致を見るが、この品種が本篇執筆当時、存在したかどうかが判らないので、かく注記するに留める。』

山門を仰いで見る、處々、壊え崩れて、草も尾花もむら生えの高い磴を登りかゝった、お米の實家の檀那寺——仙晶寺といふのである。が、燈籠寺といった方が此の大城下によく通る。

去ぬる……いやいや、いつの年も、盂蘭盆に墓地へ燈籠を供へて、心ばかり小さな燈を灯すのは、此のあたり凡てかはりなく、親類一門、それぞれ知己の新佛へ志のやりとりをするから、十三日、迎火を焚く夜からは、寺々の卵塔は申すまでもない、野に山に、標石、奥津城のある處、昔を今に思ひ出したやうな無縁墓、古塚までも、かすかな顯つばい苔の花が、ちらちらと切燈籠に咲いて、地の下の、灰白い寂しい亡靈の道が、草がく

れ木の葉がくれに、暗夜には著く、月には幽けく、冥々として顯はれる。中でも裏山の峰に近い、此の寺の墓場の丘の頂に、一樹、榎の太木が聳えて、その梢に掛る高燈籠が、市街の廣場、辻、小路。池、沼のほとり、大川縁。一里西に遠い荒海の上からも、望めば、仰げば、佇めば、みな空に、面影に立つて見えるので、名に呼んで知られて居る。「やぶちやん注…「十三日、迎火を焚く夜から」本邦では、現在も東京や一部地域を除き、盂蘭盆会は旧盆式にずらして八月の十三日から十六日までの四日間で行われるのが殆んどであるが、実は本篇の舞台である金沢市街（後注参照）に限っては、少なくとも現在は、新盆で七月の同期に行われていることがネット上の信頼出来る記事で判った。但し、旧市街地以外の石川県に殆んどの地域はやはり旧盆で行われており、鏡花にしても恐らくは民俗文化の旧通例である旧盆を尊重したい気持ちが強くあるであろうとは思われる。「顯つばい」初出も単行本「薄紅梅」も見られないのだが、この「顯」は、「濕」との解字上の連関はある漢語ではあるものの、それ自体には一切「湿る」の意はないので、明らかに「濕」の誤字か誤植と断ぜざるを得ない。「卵塔」普通は台座上に卵形の塔身を載せた墓石で、多く禪僧の墓石に用いられる無縫塔を指すのだが、鏡花は他の作品中でも、広く通常の墓をかく呼んでいる。彼が「卵塔場」と書く時は、通常墓の墓地を指す。」

この灯籠寺に對して、辻町糸七の外套の袖から半間な面を出した晝間の提灯は、松風に颯と誘はれて、いま二葉三葉散りかゝる、折からの緋葉も灯れず、ぽかぽかと暖い磴の小草の日だまりに、あだ白けて、のびれば欠伸、縮むと、嚏をしさうで可笑しい。「やぶちやん注…「半間」間拔けな感じであること。「緋へた」縋り合わせた。」

辻町は、欠伸と嚏を緋へたやうな掛聲で、

「あゝ、提灯。いや、どっこい。」

と一段踏む。

「いや、どっこい。」

お米が莞爾、

「ほゝゝ、そんな掛聲が出るやうでは、をちさん。」

「何、くたびれやしない。くたびれたといつたつて、こんな、提灯の一つぐらゐ。……尤も持重りがしたり、邪魔になるやうなら、一寸、こゝいらの薄の穂へ引掛けて置いても差支へはないんだがね。」

「それはね、誰も居ない、人通の少い處だし、お寺ですもの。そこに置いたつて、

人が何うもしはしませんけれど。……持ちませうといふのに持たさないで、をぢさん、自分の手で……」

「自分の手で。」

「あんな、知らない顔をして、自分の手からお手向けなさりたいのでせう。こゝへ置いて行つては、お志が通らないではありませんか、悪いわ。」

「お叱言で恐入るがね、自分から手向たむけるつて、一體誰だい。」

「それは誰方だか、ほゝ。」

また莞爾。

「せいせい、そんな息をして……此處がいゝ、一寸お休みなさいよ、さあ。」

丁ど段々中繼の一土間、向棧敷と云つた處、さかりに緋葉した樹の根に寄つた方で、うつむき態に片袖をさしむけたのは、縋れ、手を取らう身構へで、腰を靡娜に振向いた。

踏掛けて塗下駄に、模様の雪輪が冷くかゝつて、淡紅の長襦袢がはらりとこぼれる。「やぶ

ちゃん注…「模様の雪輪」雪を六出或いは八出形に表わした雪の結晶に基づくものと思われる定型模様。グーグル画像

検索「雪輪模様」をリンクさせておく。「淡紅」「朱鷺」「鶴」色の当て訓。我々がこの日本で滅ぼしてしまった、文字

通りの本邦の美しい二名が重なるベリカン目トキ科トキ亜科トキ属 *Nipponia nippon* である。春から夏にかけての翼の下
面は朱色がかった濃い桃色を呈する。翼を開いて飛翔する時は淡い桃色にも見える。私は四度行つた佐渡島で、初回に
檻の中の最後の「キン」を見、その後、放鳥された中国産のそれが、直近の田圃を二羽で飛ぶのを間近で見た。美しか
った。」

媚しさ、といふと雖も、お米はをぢさんの介添のみ、心にも留めなさうだが、人妻

なれば憚られる。其處で、件の晝提灯を持直すと、柄の方を向うへ出した。黒塗の柄を
引取つたお米の手は、尙ほ白くて優しい。

憚られもしようもの。磴たるや、山賊の構へた巖の砦の火見の階子と云つてもいゝ、
縦横町條の家毎の屋根、辻の柳、遠近の森に隠顯しても、十町三方、城下を往來の人々
が目を畝れば皆見える、見た其の容子は、中空の手摺にかけた色小袖に外套の熊蟬が留
つたに其のまゝだらう。

蟬はひとりでジジと笑つて、緋葉の影へ翩然と飛移つた。

いや、翩然となんぞ、そんな器用に行くものか。

「ありがたう……提灯の柄のお力添に、片手を縫つて、一方に洋杖だ。こいつがまた素人が拾つた權のやうで、うまく調子は取れないで、だらしく袖へ搔込んだ處は情ない、まるで兩杖の形だな。」

「いやですよ。」

「意氣地はない、が、止むを得ない。お言葉に従つて一休みして行かうか。丁どお詠へ、苔滑……といふと冷いが、日當りで暖い所がある。さてと、ご苦勞を掛けた提灯を、これへ置くか。樹下石上といふと豪勢だが、慍うした處は、地藏盆に筵を敷いて鉦をカシカンと敲く、はつち坊主其のまゝだね。」「やぶちゃん注…「はつち坊主」「鉢坊主」の促音化。托鉢して金品を乞い歩く僧。「鉢開き」「鉢開き坊主」とも言う。」

「そんなに、せつかちに腰を掛けてさ、泥がつきますよ。」

「構はない。破れ麻だよ。たかが墨染にて候だよ。」

「墨染も、喜撰でも、所作舞臺ではありません、よくれますわ。」「やぶちゃん注…「喜撰」ここは

表は茶の銘柄「喜撰」に掛けた色で、濃い黄色或いは濃い緑色を指しているよう。而して、それに、日本舞踊や歌舞伎の演目である「喜撰」を利かせて、以下の「所作舞臺ではありません」という言い掛けを引き出したものと思われる。」

「どうも、これは。きれいな其の手巾で。」

「散つて居るもみぢの方が、きれいです、拂つては澄まないやうな、こんな手巾。」

「何色といふんだい。お志で、石へ月影まで映して來た。あゝ、いゝ景色だ。いつも此處は、といふうちにも、今日はまた格別です。あひかはらず、海も見える、城も見える。」

といった。

就中、公孫樹は黃也、紅樹、青林、見渡たす森は、みな錦葉を含み、散残つた柳の綠を、うすく沙に綾取つた中に、層々たる城の天守が、遠山の雪の巔を抽いて聳える。そこから斜に濃い藍の一線を曳いて、青い空と一刷に同じ色を連ねたのは、いふ迄までもなく田野と市街と城下を巻いた海である。荒海ながら、日和の穏かさに、渚の浪は白菊の花を敷流す……此の友禪をうちかけて、雪國の町は薄霧を透して青白い。その袖と思ふ一端に、周圍三里ときく湖は、晝の月の、半圓なるかと視なめられる。

「お米坊。」

をぢさんは、目を移して、

「景色もいゝが、容子がいゝな。——提灯屋の親仁が見惚れたのを知つてゐるかい。

（其の提灯を一つ、いくらです。）といったら、

（何ぞ早、お持ちなされまして……お代だいはお次手の時、）……は何だい。そのかはり、遠國他郷のをぢさんに、賣ものを新聞づつみ、紙づつみにしようともしないんだぜ。豈それ見惚れたりと言はざるを得んやだ、親仁。」

「おつしやい。」

と銚子のかはりをたしなめるやうな口振で、

「旅の人だか何だか、草鞋も穿かないで、今時そんな、見たばかりで分わかりますか。それだし、此の土地では、まだ半季勘定がございます。……でなくつてもさ、當寺へお参りをする時、ゆきかへり通るんですもの。あの提灯屋さん、母に手を曳かれた時分から馴染です。……いやね、そんな空お世辭をいつて、澤山。……をぢさんお参りをするのに極りが悪いもんだから、おだてごかしに、はぐらかして。」「やぶちゃん注…「それだし」「それに付け加へて」の縮約形。方言ではない。「半季勘定」商家の附け勘定で半年毎に支払決済をすること。「おだてごかし」通常は「粹人だ」とおだてあげて、自分の都合のよいように事を運んでしまうことを言う「粹ごかし」を言うが、ここは少し変則的で、粹人と見做すのは言っている辻町自身である。」

「待つた、待つた。——お京さん——お米坊、お前さんのお母さんの名だ。」

「はじめまして伺ひます、ほゝい。」

「ご挨拶、恐入つた。が、何々院——信女でなく、ごめんを被らう。その、お母さんの墓へお参りをするのに、何だつて、私がきまりが悪いんだらう。第一そのために來たんぢやないか。」

「……それはご遠慮は申しませんの。母の許へお参りをして下さいますのは分つて居ますけれどもね、其のさきに——誰かさん——」

「誰かさん、誰かさん……分らない。米ちゃん、一體その誰かさんは？」

「母が、いつも然ういつて居ましたわ。をぢさんは、（極りわるがり屋）といふ（長い屋）さんだから。」

「どうせ、長屋住居だよ。」

「ごめんなさい、そんなぢやありません。だからつても、何も私に——それとも、思ひ出さない、忘れたのなら、それはひどいわ、餘りだわ。誰かさんに、悪いわ、濟まないわ、薄情よ。」

「しばらく、しばらく、まあ、待つておくれ。これは思ひも寄らない。唐突たの儀を承はる。弱つたな、何だらう、といつちや尙ほ悪いかな、誰だらう。」

「眞個に忘れたんですか。それで可いんですか。嘘でせう。それだと餘りぢやありませんか。一層ちやんと言ひますよ、私から。——然ういつても釣出しにかゝつて私の方が極りが悪いかも知れませんが……。をぢさん、をぢさんが、むかし心中をしようにとした、婦人のかた。」

「……………」

藪から棒をくらつて膨らんだ外套の、黒い胸を、辻町は手で壓へる眞似して、目を睜と、

「もう堪忍してあげませう。餘り知らないふりをなさるから一寸驚かしてあげただけで、それでも、もうお分りになつたでせう。——いつかの、その時、花の盛りの眞夜中に。

——あの、お城の門のまはり、暗い堀の上を行つたり、來たり……」

お米の指が、行つたり來たり、ちらちらと細く動くと、その動くのが、魔法を使つたやうに、向う遙かな城の森の下ぐぐりに、小さな男が、とぼんと出て、羽織も着ない、しよぼけた形を顯はすとともに、手を拱き、首を垂れて、とぼとぼと歩行くのが朧に見える。それ、糧に飢ゑて死なうとした。それが其の夜の辻町である。

同時に、もう一つ。寂しい、美しい女が、花の雲から下りたやうに、すつと翳つて、おなじ堀を垂々下りに、町へ續く長い坂を、胸を柔に袖を合せ、肩を細りと裙を浮かせて、宙に漾ふばかり。さし俯向いた頸のほんのり白い後姿で、捌く棲も揺ぐと見えない、もの靜かな品の好きで、夜はたゞ黒し、花明り、土の筏に流るゝやうに、満開の櫻の咲蔽ふ其の長坂を下りる姿が目映つた。

——指を包め、袖を引け、お米坊。頸の白さ、肩のしなやかさ、餘り其の姿に似てならぬ。——

今、目のあたり、坂を行く女は、あれは、二十ばかりにして、其の夜、（鳥をいふ）千

羽ケ淵で自殺してつたのである。身を投げたのは潔よい。

卑怯な、未練な、おなじ處をとぼついた男の影は、のめのめと生きて、こゝに仙晶寺の磴の中途に、腰を掛けて居るのであつた。「やぶちゃん注」：「仙晶寺」「燈籠寺」といつた方がこの

おほじやうか大城下によく通る」本篇もまた、泉鏡花の郷里金沢が舞台である。この寺は石川県金沢市東山にある日蓮宗普香山蓮昌寺がモデルである。ここで、鏡花の生家のあつた下新町も近い（前の地図の左下に配した。別に同じデータの航

空写真で浅野川を挟んでほぼ対照位置にある金沢城跡を見て貰おう。本篇の主ロケーションと鏡花の生家がここに総て含まれる。明らかに本篇は鏡花自らが最後の作品として確信犯で書いたものであることが判る。これはまさしく鏡花の原母への回帰を期した「ノスタルギア」（ロシア語：Ностальгия／語原：ギリシャ語ラテン文字転写 *nostos*（故郷へ戻る）+ *algos*（痛み））：私の「[Андрей Тарковский 断章](#)」を参照されたい）の産物であつたのである。同寺の公式サ

イトには「[泉鏡花ゆかりの寺](#)」のページがあり（一部に本篇の軽いネタバレがあるが、寧ろ、読解をし易くしてくれるし、現在の盆燈籠の墓地を撮った写真は映像として必見とさえ言える）、本篇の舞台であることが明記されて、『鏡花の生家は日蓮宗であつたために、ゆかりの寺はほぼ日蓮宗系です。鏡花は』十『歳の時に母を亡くしましたが、蓮昌寺は、母亡き後、無名時代の鏡花を親身になって助けた、従妹』（註）『の目細照の菩提寺でもあります』とある。以下、蓮昌寺は「[纏紅新草](#)」の中では『仙昌寺』と称され、別名「燈籠寺」とも書かれています。小説の通り「いつの年も、孟蘭盆に墓地へ燈籠を供えて、心ばかり小さな燈を灯す」ところから、古くから燈籠寺の別名で親しまれ、その名を知らぬ者は界限にはいませんでした』として、『小説では、夏の夜の美しい切燈籠の灯りの描写はさらに続いています。

「十三日、迎火を焚く夜からは、』として、以上の「一」の一節が「名に呼んで知られて居る」まで引用されており、最後に、『鏡花の生家のある下新町辺りから見ると、浅野川の向こう岸には、蓮昌寺のある山麓寺院群を擁する卯辰山が優しい姿で横たわっています。蓮昌寺から更に登ると、鏡花の母が埋葬された地、卯辰山があります。「燈籠寺」の幻想的な世界は、母的な世界、母性へと連なっています』とある。なお、この実際には鏡花の従妹である細目照は、実は鏡花の諸作品の重要な登場人物のモデルとして多く登場する。越野格氏の論文「泉鏡花論」（『北海道大学文学部紀要』（一九八〇年三月発行。『[北海道大学附属図書館](#) 公式サイト内の「HUSCAP」（北海道大学学術成果コレクション）

のこちらからダウン・ロード可能）によれば、「さゝ蟹」（明治三〇（一八九七）年五月）の「お京」（本篇と同名）に始まり、「女客」・「月夜」・「町双六」・「卯辰新地」・「由縁の女」・「卵塔場の天女」・「飛剣幻なり」・「古貉」そして本篇（ここで既に見た通り、やはり「従姉で、一昨年世を去つたお京」を「お米」の母とする。ここにも確信犯の回帰性を感じられ、本作の「白鳥の歌」の証しとも言えると私は思う）のを挙げておられる。本篇を未読の方は、読後に是非参照されたい優れた論考である。『[周囲三里とさく湖](#)』河北潟。金沢市市街から八キロメートルほど離れ

た、能登半島の西側の根に近い附近にある、金沢市と河北郡内灘町に跨る日本海の一部が内灘砂丘によって堰きとめられて形成された海跡湖である。かつては汽水湖であったが、干拓が行われた結果、現在は淡水湖である。本来は面積二十三平方キロメートルで、周囲長約三十七キロメートルと広大な潟湖であったが、近世以降、特に戦後に干拓が進み、本来の大きさの十分の一以下に減ってしまった。但し、戦前までは、原形に近い状態で残っていたので、本篇の描写で

は「ひなたGPS」の地図で、その旧景を想像されたい（右上の「2画面」をクリックすると、現在の地図と並置出来る）。「**それ、糧に飢えて死なうとした。それが其の夜の辻町である**」こういう事実は泉鏡花にはない。「町へ續く長

い坂」兼六園の北西の、金沢城跡との間を南西に登っている、「兼六園下」交差点から登ってゆく「紺屋坂」、及び、それに接続する「下坂」（二つの坂は概ね「お堀通り」と並走する。少なくとも、現在のこの「下坂」は桜の名所として知られている）がロケーション・モデルとなるときか思われないのだが（ここ）。グーグル・マップ・データ航空写真、グーグル・アースでシュミレートしてみた限りでは、実際の蓮昌寺から、その付近を肉眼で遠望するのは、相応に視力がよくないと厳しい感じはした。少なくとも同寺の現在の墓は、階段を登るとはいえ、所謂、金沢城跡を見降ろして俯瞰出来るような高い位置にはないようなのである（階段は確認出来る。同前の寺のアップ画像。ただ、糸七は、このシーンでは、しかもこの「磴の中途に、腰を掛けて居る」のである）。さらに、金沢城跡は浅野川を挟んで、直線で一キロ以上離れている。但し、ここは時間の巻き戻しによる、糸七の回想世界への始動シークエンスであるから、そこがぐっとアップされて映像的描写がなされること自体は、言うまでもなく、全く違和感はない。ただ、私はおいそれと金沢には行って実地に検分すること（辻町がするように、蓮昌寺から金沢城跡の南東の角の坂下が視認出来るかどうか）は出来ないことから、仮に現実的なシュミレーションをしてみたのである。寧ろ、蓮昌寺の解説にある、鏡花の母が眠る卯辰山からの俯瞰イメージというのが、作品内の映像としては最もしっくりくるように私には思われる。

「（鳥をいよ）千羽ヶ淵」この部分、蹟く読者がいるかと思うので、まず、注すると、前の丸括弧注記は「千羽ヶ淵」という淵名は、「鳥」が千羽、則ち、さわに多くいる淵という呼称だという注であろうということである。しかし、これは本小説内の架空の市井の通称であるように思われ、現在の金沢市内にそれらしい淵名は見当たらない。一応、藩政期の金沢城絵図も調べてみたが、それらしい名は金沢城周辺にはない。「淵」というのは、一般には、河川の深い箇所附するものだが、この場合、実は――所謂、旧金沢城の堀割を指している――と言って――なるほど、と無批判に納得されてしまつては、実は困るのである。そもそも同城の堀は、明治のかなり早い時期に大方が消失しているようだからである（金沢城跡は「今昔マップ」で見ると、明治期から、第二次世界大戦敗戦までは、陸海軍の集中拠点

（★）の地図記号三種が見える。二重丸（◎）の中に「★」があるのが「師団司令部」、ただの「○」の中に「★」があるのが「旅団司令部」、ただの「★」が「連隊区司令部」で、北位置にある「厩」の中に「厩」があるそれは「海軍

兵營」を示す。東部分には「歩兵營」の文字もある）で、実は堀は恐らく明治の早い時期に悉く埋め立てられていたものらしく、地図上には堀の「ほ」の字の掘割記号さえもないように見えるのである）。個人的は澱んだ堀に入水自殺するというのはちょっと厭だが、まあ、死ぬのは同じだから構わぬか。なお、先に「長坂」に同定した「下坂」は登ったところ（金沢城南直下）には、現在は「[いもり堀](#)」（グーグル・マップ・データ。江戸時代の絵図では「いもり」を「守宮」とする。古くより近代までヤモリとイモリは文芸作品や民間伝承では両方向の誤使用・慣用使用が激しくあった）という真っ直ぐな綺麗な掘割がある。しかし、この「いもり堀」は、ごく近年になって復元したものらしい（[金沢城公園](#) [公式サイトの「金沢城公園整備の概要](#)」）を見よ。そこでは「いもり堀」と表記している。しかしこの「千羽ヶ淵」が動物由来とすると、案外、嘗つて藩政時代にあったこの「[守宮堀](#)」が鏡花の架空の淵（堀）のヒントとなっているのかも知れない）。従つて、実は城下町でありながら、作品内時制の金沢城跡には、実はこんな入水自殺可能な堀はなかった、この如何にもありそうで誰も信じて疑わない（当たり前前に城跡には掘割があるという無批判な読者認識）という大道具が、実は、なんと、架空だった可能性が頗る高いのである。鏡花の平行な意外な異界として面白。」

二

「あゝ、まるで魔法にかゝつたやうだ。」
頬にあてて打傾むいた掌を、辻町は冷く感じた。時に短く吸込んだ煙草の火が、チリ、と耳を掠めて、爪先の小石へ落ちた。
「また眞個夢がさめたやうだ。――其の時、夜あけ頃まで、堀の上をうろついて、いつ家へ歸つたか、草へもぐつたのか、蒲團を引被つたのか分らない。打ち踏めされたやうになつて寝た耳へ、
――兄さん……兄さん――
と、聞こえたのは、……お京さん。」
「返事をしませうか。」
「願はうかね。」
「はい、おほ。」
「申すまでもない、威勢のいゝ若い聲だ。然うだらう、お互に二十の歳です。――死んだ

人は、たしか一つ上だつたやうに後で聞いて覚えて居る。前の晩は、雨氣を含んで、花あかりも朦朧と、霞に綿を敷いたやうだつた。格子戸外の其の元氣のいゝ聲に、むつくり起きると、おつと來たりで、目は窪んでゐる……額をさきへ、門口へ突出すと、顔色の青さを烘られさうな、からりとした春爛な朝景色さ。お京さんは、結びたての銀杏返で、半襟の淺黃の冴えも、黒縹子の帶の艶も、霞を拂つてきつぱりと立つて居て、（兄さん身投げですよ、お城の堀で。）（嘘だよ、こゝに生きてるよ。）と、うつかり私が言つたんだから、お察しものです。すぐ背後の土間ぢや七十を越した祖母さんが、お櫃の底の、こそげ粒で、茶粥とは行きません、みぞれ雑炊を煮てござる。前々年、家が焼けて、次の年、父親がなくなつて、まるで、掘立小屋だらう。住むにも、食ふにも——昨夜は城のこゝかしこで、早い蛙がもう鳴いた、歌を唄つてる蟲けらが、凡そ羨しい、と言つた場合。……祖母さんは耳が遠いから可かつたものの、（生きてるよ。）は何事です。（何を寢惚けて居るんです。確乎するんです。）其の頃の様子を察して居るから、お京さん——まゝならない思遣りのじれつたさの疳癪筋で、ご存じの通り、一うちの眉を顰めながら、（……町内ですよ、此處の。いま私、前を通つて來ただけれど、角の箔屋。——うちの人ぢやあない、世話になつて、はんけちの工場へ勤めて居た娘さんですとさ。ちゃんと目をあいて……あれ、あんなに人が立つて居る。）うらゝかな朝だけれど、路が一條、胡粉で泥塗たやうに、ずつと白く、寂然として、家やならび、三町ばかり、手前どもとおなじ側です、けれども、何だか遠く離れた海際まで、突拔けに成つたやうで、其處に立つて居る人だから——身を投げたのは淵だといふのに——打つて來る波を避けるやうに、むらむらと動いて、地が其處ばかり、ぐつしより汐に濡れてゐるやうに見えた。「やぶちゃん注：「おつと來たりで」「おつと、起きて來たままという塩梅で」の意。「急に起こされて、寢惚けた半眼のまんまで、これ、御出座、という体たらく」ということ。「身投げですよ、お城の堀で」とあるからには、前注の事実とは反して、作品内には、相応の旧金沢城の通称「千羽ヶ淵」という相応に深い掘割があり、そこから（登場人物の住まいなどのロケーション・モデルから）、恐らくは海に直に下る浅野川に繋がる流れが存在したことになる」と読める。因みに、[鏡花の生家附近の現在の国土地理院図](#)を見ると、まさに新町の町内を割って流れて主計町の西を浅野川に流れる水路がある。見るに、これは現在、一部が暗渠であるらしく、そうすると、或いは、主計町の上流直近の浅野大橋の南詰の東方にある流れが、それと合流しているのかも知れない。これは[グーグル・マップ・データ](#)でも確認出来る小流れ（今は甚だ細い）

である。但し、この川は、現在の地図を見る限りでは、旧金沢城の掘割に繋がっていたようには見受けられない。「一うち」「一打ち」。「一」の字に見立てて「眉」のことを指す。「箔屋」金・銀などの箔を製造し、販売する店。名因みに、鏡花の父清次は、工名を政光と称し、加賀藩細工方白銀職の系譜に属した象眼細工・彫金等を生業とした鋳職人であった。」

花はちらちらと目の前へ散つて來くる。

私の小屋と眞向の……金持は焼けないね……しもた屋の後妻で、町中の意地悪が——今時はもう影もないが、——それ其の時飛んで來た、燕の羽の形に後を刎ねた、橋鬘とかいふのを小さくのつけたのが、門の敷石に出て來て立つて、おなじやうに箔屋の前を熟とすかして視て居た。其の繼娘は、優しい、うつくしい、上品な人だつたが、二十にもならない先に、雪の消えるやうに白梅と一所に水で散つた。いぢめ殺したんだ、あの繼母がと、町内で沙汰をした。其の色の浅黒い後妻の眉と鼻が、箔屋を見込んだ横顔で、お米さんの前髪にくツつき合つた、と私の目に見えた時さ。(いとしゃ。)と其の後妻が、(なう、ご親類の、ご新姐さん。)——悉しくはなくても、向う前だから、様子は知つてる、行來、出入りに、顔見知りだから、聲を掛けて、(いつ見ても、好容色なや、はゝゝ。)と空笑ひをやつたとお思ひ、(非業の死とはいふけれど、根は身の行ひでござりますなう。)とじろりと二人を見ると、お京さん、御母堂だよ、いゝかい。怪我にも眞似なんかさんなよ。即時、好容色な頤を打つけるやうにしゃくつて、(はい、さやうでござります、なう。)と云ふが疾いか、背中の子。」「やぶちゃん注…「橋鬘」不詳。小学館「日本国語大辞典」にもネット上にも見当たらない。」

辻町は、時に、まつげの深いお米と顔を見合せた。

「その日は當寺へお参りに來がけだつたのでね、……お京さん、磴が高いから半纏おんぶでなしに、浅黄鹿の子の紐でおぶつて居た。背中へ、べつかつこで、(ばあ。)といふと、カタカタと薄齒の音を立てて家中へ入つたらう。私が後妻に赤くなつた。

負ぶつて居たのが、何を隠さう、こゝに好容色で立つて居る、さて、久しぶりでお目にかけります。お前さんだ、お米坊——二歳、いや、三つだつたか。かぞへ年。」

「かぞへ年……」

「あゝ、然うか。」

「をぢさんの家の焼けた年、お産間近に、お母さんが、あの、火事場へ飛出したもんですから、その所爲ですつて……私には痣が。」

睫毛がふるへる。辻町は、ハツとしたやうに、ふと肩をすくめた。

「あら、うっかり、をぢさんだと思つて、つい。……眞赤でしたわ、おとなになつて今ぢや薄とたゞ青いだけですの。」

をぢさんは目を俯せながら、故と見まもつたやうに慍ういつた。

「見えやしない、何もないぢやないか、何處なのだね。」

「知らない。」

「まあさ。」

「乳の少し傍のところ。」

「きれいだな、眉毛を一つ刺つた痕か、雪間の若菜……とても言つて居ないと——父がなくなつて歸つたけれど、私が一度無理に東京へ出て居た留守です。私の家のために、お京さんに火事場を踏ませて申譯がないよ。——處で、その嬰兒が、今お見受け申すお姿となつたから、もうかれこれ三十年。……だもの、記憶も何も朧々とした中に、其の悲しいうつくしい人の姿に薄明りがさして見える。遠くなつたり、近くなつたり、途中で消えたり、目先へ出たり——此方も、とぼとぼと死場所を探して居たんだから、どうも人目が邪魔になる。さきでも目障りになつたらう。やがて夜の三時過ぎ、天守下の坂は長いからね、坂の途中で見失つたが、見失つた時の後姿を一番はつきりと覚えて居る。だから、其の人が淵で死んだとすると、一旦町へ下りて、もう一度、坂を引返した事になるんだね。」「やぶちゃん注」「私が一度無理に東京へ出て居た留守です。私の家のために、お京さんに火事場を踏ませて申譯がないよ」この部分は泉鏡花の年譜の事実と符合する。鏡花は明治二二（一八八九）年十一月に上京、二年後の明治二十四年十月十九日に念願であつた牛込の尾崎紅葉宅を訪ね、快く入門を許され、その日から尾崎家での書生生活を始めているが、翌明治二五（一八九二）年十二月、金沢市の大火（同年十一月十日）で実家が焼失した際のみ、彼は一時帰郷をしている（年末には東京へ戻っている）からである。「一旦町へ下りて、もう一度、坂を引返した事」この描写は、前に言つた「いもり堀」が不思議によく一致する。前にリンクした航空写真を参照されると高低がはつきり判る。」

たゞし、然ういつた處で、あくる朝、町内の箔屋へ引取つた身投の娘が、果して昨夜

私が見た人と同じだか何うだか、實の處は分りません……それは今でも分りはしない。堀端では、前後一度だつて、横顔の鼻筋だつて、見えないばかりか、解りもしない。が、朝、お京さんに聞いたばかりで、すぐ、あゝ、其れだと思つたのも、おなじ死ぬ氣の、氣で感じたのであらうと思ふ……

と、お京さんが、むかうの後妻の目をそらして、格子を入つた。おぶさつたお前さんが、それ、今のべつかつこで、妙な顔……」

「えゝ、ほゝゝ。」

とお米は軽く咲容して、片袖を胸へあてる。

「お京さん、いきなり内の祖母さんの背中を一つトンと敲いたと思ふと、鐵鍋の蓋を取つて覗いたつけ、勢のよくない湯氣が上る。」

お米は軽く鬢を撫でた。

「ちよろちよろと燃えてる、竈の薪木、其の火だがね、何だか身を投げた女をあぶつて暖めて居るやうな氣がして、消えぎえに其處へ、袖袂を纏れて倒れた、ぐつしより濡れた髪と、眞白な顔が見えて、まるで其れがね、向う門に立つて居る後妻に、はかない戀をせかれて、五年前に、おなじ淵に身を投げた、優しい姉さんのやうにも思はれた。餘程どうかして居たんだね。」

半壞れの車井戸が、すぐ傍で、底の方に、ばたん、と寂しい雫の音。

ざらざらと水が響くと、

——身投げだ——

——別嬪だ——

——身投げだ——

と戸外を喚いて人が驅けた。

この騒ぎは——さあ、それから多日、四方、隣國、八方へ、大波を打つたらうが、

——三年の間、かたい慎み——

だツてね、お京さんが、その女の事については、當分、口へ出してうはささへしなれば、また私にも、話さへさせなかつたよ。

——おなじ櫻に風だもの、兄さんを誘ひに來ると悪いから——

其の晩、おなじ千羽ヶ淵へ、ずぶずぶの夥間だつたのに、懃死にはぐれると、今さら氣味が悪くなつて、町をうろつくにも、山の手の辻へ廻つて、箔屋の前は通らなかつた。：

此の土地の新聞一種、買つては讀めない境遇だつたし、新聞社の掲示板の前へ立つにも、土地は狭い、人目に立つ、死出三途ともいふ處を、一所に彷徨つた身體だけに、自分から氣が怯けて、避けるやうに、避けるやうに、世間のうはさに遠ざかつたから、花の散つたのは、雨か、嵐か、人に礫を打たれたか、邪慳に枝を折られたか。今もつて、取留めた、悉しい事は知らないんだが、それも、もう三十年。

……お米さん、私は、おなじ其の年の八月——こゝいらはまだ、月おくれだね、盂蘭盆が過ぎてから、いつも大好きな赤蜻蛉の飛ぶ時分、道があいて、東京へ立てたんだが。——

——あゝ、然うか。」

辻町は、息を入れると、石に腰をずらして、ハタと軽く膝をたゝいた。「やぶちゃん注：『三十年』これを先に示した鏡花の事実に合わせるなら、作品内の現在時制設定は大正一一（一九二二）年か、その前年となる。本篇の発表は昭和一四（一九三九）年である。但し、東京へ戻つたのを、『月おくれ』の『盂蘭盆が過ぎてから』とするように、大火の時期も、帰京の時期も、実際とは異なり、半年以上も前倒しにしてあることが判る。これは、回想される薄幸の娘の入水を、春、闌の桜の時節にもつてくるという鏡花的な雅びの必要性からであることは言うまでもないが、私は、鏡花が是が非でも、盂蘭盆を、この回想シックエンスの閉区間内に設定しなくてはならなかつたからではないか、と私は考えている。それは、辻町ひいては鏡花自身の亡き親族のみならず、作中の入水した女のそれへの手向けを表わしたかつたからであり、或いは、穿つて考えるなら、自身の全作品の中に登場させた架空の死者たちの靈総てへの壮大なレクイエム（或いはまさに寿命の尽きんとすることを予覺していたであろう鏡花自身さえも含めて）をも、本篇の大きな額縁として求めたかつたからではなからうか。」

二二

その時、外套の袖にコトンと動いた、石の上の提灯の面は、又をかしい。いや、をかしくない、大空の雲を淡く透して蒼白い。

「……さて、此だが、手向けるとか、供へるとか、お米坊のいふ——誰かさんは——」

「えゝ、然うなの。」

と、小菊と坊さん花を一寸圍つて、お米は靜に頷いた。

「その嬰兒が、串戯にも、心中の仕損ひなどといふ。——いづれ、あの、いけずな御母堂から、いつかその前後の事を聞かされて、それで知つて居るんだね。」

不思議な、怪しい、縁だなあ。——花あかりに、消えて行つた可哀相な人の墓はいかにも、此の灯籠寺にあるんだよ。

若氣のいたり。……」

辻町は、額をおさへて、提灯に俯向いて、

「何と思つたか、東京へ——出發間際、人目を忍んで……といふと悪く色氣があります。何、こそこそと、鼠あるきに、行燈形の小さな切籠燈の、就中、安價なのを一枚細腕で引いて、梯子段の片暗がりをお忍ぶやうに、此の磴を隅の方から上つて來た。胸も、息も、どきどきしながら。」

ゆかたどか、羅だか、女郎花、桔梗、萩、それとも薄か、淡彩色の燈籠より、美しく寂しからう、白露に雫をしさうな、その女の姿に供へる氣です。

中段さ、丁ど今居る。

然るに、何だい。お米坊は洒落にも私を、薄情だといふけれど、人間の薄情より三十年の月日は情がない。此の提灯でいふのぢやないが、燈臺下暗しで、とぼんとして氣がつかなくつた。申譯より、面目がないくらゐだ。

——すまして饒舌つて可いか知らん、その時は、此のもみぢが、青葉で眞黒だつた下へ來て、上へ墓地を見ると、向うの峯をぼつと、霧にして、木曾のはゝき木だね、こゝぢや、見えない。が、有名な高燈籠が榎の梢に灯れて居る……葉と葉をくゞつて、燈の影が露を誘つて、ちらちらと樹を傳ふのが、長くかゝつて、幻の藤の總を、すつと靡かしたやうに仰がれる。繪の模様は見えないが、まるで、其の高燈籠の宙の袖を、其の人の姿のやうに思つて、うつかりとして立つた。「やぶちやん注…「木曾のはゝき木」「木曾の帚木」。信濃国

園原伏屋（現在の長野県下伊那郡阿智村智里）にあつたという木。遠くから見れば、箒を立てたように見えるが、近寄ると見えなくなるという伝説の木で、平安時代の和歌に詠まれ、「近づいても逢つてくれない人、逢えそうでも逢えない

い人」の喩えに用いられ、「源氏物語」第二帖「帚木」の帖名ともなった（そこではその相手は空蟬である）。また、その名の「はは」が「母」に通うことから、「まだ見ぬ母」の喩えにも使われた。その「帚木」として名を伝えるヒノキは、その園原の月見堂（最澄が立てた広 拯院の跡地と考えられている）の裏手に根元の幹のみが残っている。[ここ](#)（グーグル・マップ・データ）。以上は[ウィキペディアの「帚木」](#)に拠った。」

——あゝ、呆れた——

目の前に、白いものと思つたつけ、山門を眞下りに、藍がかつた浴衣に、晝夜帯の婦人が、

——身投に逢ひに來ましたね——

言ふ事も言ふ事さ、誰だと思ひます。御母堂さ。それなら、言ひさうな事だらう。いきなり、ぐわんと撲はされたから、をぢさんの小僧、目をまるくして膽を潰した。然うだらう、當の御親類の墓地へ、といつては、つひぞ、つけとゞけ、盆のお義理なんぞに出向いた事のない奴が、「[やぶちゃん注…「晝夜帯」表と裏を違う布で縫い合わせた女帯。所謂、リバーシブルの帯である。本来は、黒緇子に白い裏地を付けたことから「晝夜」に喩えた名、鯨の背と腹に喩えて「くじら帯」とも呼ぶ。]

辻町は提灯を押へながら、

「酒買ひ狸が途惑をしたやうに、燈籠をぶら下げて立つて居るんだ。

いふ事ことが捷早いよ、お京さん、然う、のつけにやられたんぢや、事實、親類へ供へに來たものにした處で、然うとはいへない。

——初路さんのお墓は——

如何にも、若い、優しい、が、何だか、弱々した、身を投げた女の名だけは、いつか聞いて居た。

——お墓の場所は知つて居ますか——

知るもんですか。お京さんが、崖で夜露に、迂る處へ、石ころ道が切立てで危ないから、そんなにとぼついて居るんぢや怪我をする。お寺へ預けて、晝間あらためて、お参りを、然うなさい、といふ。此方はだね。日中のこのこ出られますか。何、志はそれで済むから此の石の上へ置いたなり歸らうと、降参に及ぶとね、犬猫が踏んでも、きれいなお精靈が身震ひをするだらう。——とに角、お寺まで、と云つて、お京さん、今度は片棲をきりりと端折つた。

此方も其の要心から、故と夜になつて出掛けたのに、今頃まで、何をして居たらう。(遊んで居た。世の中の煩さゝがなくて寺は涼しい。裏縁に引いた山清水に……西瓜は驕りだ、和尚さん、小僧には内證らしく冷して置いた、紫陽花の影の映る、青い心太をつるつる突出して、芥子を利かして、冷い涙を流しながら、見た處三百ばかりの墓燈籠と、草葉の影に九十九ばかり、お精靈の幻を見て涼んで居た、その中に初路さんの姿も。)と、お京さん、好きなお轉婆をいつて、山門を入つた勢だからね。……その勢だから……向つた本堂の横式臺、あの高い處に、晩出の參詣を待つて、お納所が、盆禮、お返しするしと、紅白の麻絲を三寶に積んで、小机を控へた前へ。どうです、私が引込むもんだから、お京さん、引取つた切籠燈をツイと出すと、

——此の春、身を投げた、お嬢さんに。……心中を仕損つた、此の人の、

こゝろざし——

私は門まで遁出したよ。あとをカタカタと追つて返して、

——それ、紅い絲を持つて來た。縁結びに——白いのが好かつたか知ら、

……あひては幻……

と頬をかすられて、私は此の中段まで轉げ落ちた。些と大袈裟だがね、遠くの暗い海上で、稻妻がして居たよ。其の夜、途中からえらい降りで。」……

……

……

辻町は夕立を懷ふ如く、少時息を沈めたが、やがて、一寸語調をかへて云つた。

「お米坊、そんな、こんな、お母さんに聞いて居たのかね。」

「えゝ、お嫁に行つてから、あと……」

「然うだらうな、あの氣象でも、極りどころは整然として居る。嫁入前の若い娘に、餘り聞かせる事ことぢやないから。」

——さて、問題の提灯だ。成程、其の人に、切籠燈のかはりに供へると、思つたのは尤だ。が、そんな、實は、しをらしいとか、心入れ、とかいふ奇特なんぢやなかつたよ。懺悔をするがね、實は我ながら、とぼけて居て、ひとりでをかしいくらゐなんだよ。月夜に提灯が贅澤なら、眞晝間ぶらで提げたのは、何だらう、餘程半間さ。

といふのがね、先刻お前さんは、連にはぐれた觀光團が、鼻の下を伸ばして、うつかり見物して居る間拔けに附合ふ氣で、黙つてついて居てくれたけれど、來がけに坂下の小路中で、あの提灯屋の前へ、私が茫乎突立つたらう。

場所も方角も、まるで違ふけれども、むかし小學校の時分、學校近所の……あすこは大川近の窪地だが、寺があつて、其の門前に、店の暗い提灯屋があつた。髻のある親仁が、紺の筒袖を、斑々の胡粉だらけ。腰衣のやうな幅廣の前掛したのが、泥繪具だらけ、青や、紅や、其のまゝ轉がつたら、樂書の獅子になりさうで、牡丹をこつてりと刷毛で彩る。緋を桃色に颯と流して、ぼかす手際が鮮彩です。それから鯉の瀧登り。八橋一面の杜若は、風呂屋へ進上の祝だらう。そんな比羅繪を、のし掛つて描いて居るのが、嬉しくて、面白くつて、繪具を解き溜めた大摺鉢へ、鞠子の宿ぢやないけれど、薯蕷汁となつて溶込むやうに……學校の歸途には其の軒下へ、いつまでも立つて見て居た事を思出した。時雨も霽も知つて居る。夏は學校が休です。櫻の春、また雪の時なんぞは、その緋牡丹の燃えた事、冴えた事、葉にも苔にも、パツパツと惜氣なく金銀の箔を使ふのが、御殿の廊下へ日の射したやうに輝いた。然うした時は、家へ歸る途中の、大川の橋に、綺麗な牡丹が咲いたつけ。「やぶちゃん注…むかし小學校の時分、學校近所の……あすこは大川近の窪地だが」泉鏡花は明治一三（二八八〇）年四月、金沢市東馬場にある養成小學校（現在の金沢市立馬場小學校。グーグル・マップ・データ）に入学している。地図でお判りの通り、現在位置の蓮昌寺西北西三百メートル余りの直近である。「今昔マップ」で

明
治後期の地図を見て貰いたい。同小學校の北側は特異的に地図が白く、町屋がなく、田圃であることが判る。則ち、これは「大川」（ここでは浅野川を指す）に「近」い有意な「窪地」という言い方と合致する。さらに、既に述べた通り、鏡花の生家のあつた下新町は、この小學校を頂点とした正しい二等辺三角形の南西角に当たる。而して、本篇の舞台が悉く鏡花自身の幼少時代の思い出とオーバー・ラップする、謂わば、ミステリアスなトライアングルの小結界を成していることになるのである。「比羅繪」思うに、これは「繪びら」ではないか？ 本来は広く恵比寿・大黒・福神などの縁起物を描き入れた宣伝用の広告紙を指すが、ここは提灯屋が提灯に絵柄を描いたり、片手間の張り紙などをも手掛けていたであろう。以上は「びらえ」で、あらゆる辞書を調べてみて、どうもピンとくるものがなかったところから、「びら」は今の「ビラ」と同じで、そこに絵を描いた、提灯屋だから、提灯の紙張りにも描いたりしただろうと考えて、ひっくり返して「びらえ」で検索したところ、図に当たった。「足立区」公式サイト内の「足立を学ぶ 足立区立郷土博物館」の「びら武（びらたけ）」が目についたのであった。広告紙の部分の記載（下線部分）はそこに拠つたもので

ある。次の段落のさっきの提灯屋の話を見てもまさにそれで間違いない。お読みあれ。「鞠子の宿ぢやないけれど、
薯蕷汁となつて溶込むやうに」芭蕉の句「梅若菜丸子の宿のとり汁」（「猿蓑」の「巻之五」所収。前書「饒乙國東武
行」）に洒落たもの。元禄四（一六九一）年正月、大津の川井乙州邸で、江戸へ下る亭主の乙州のための送別の席で巻
かれた歌仙の発句にして、彼への饒の吟である。私の好きな句である。後の服部土芳の俳論「三冊子」（元禄一六
（一七〇三）年頃の成立）の「赤冊子」で、芭蕉は自評して「ふと云てよろしと跡にてしりたる也」と言っている。
先刻のあの提灯屋は、繪比羅も何にも描いては居ない番傘の白いのを日向へ並べて居た
んだが、つい、その昔を思出して、餘り店を覗いたので、たゞぢや出て来にくくなつた
もんだから、觀光團お買上げさ。

——ご紋は——

——牡丹——

何、描かせては手間がとれる……第一實用むきの氣といつては、聊もなかつたからね。
これは、傘でもよかつたよ。パツと擴げて、菊を持つたお米さんに、背後から差掛けて
登れば可かつた。」

「どうぞ。……女萬歳の廣告に。」

「仰せのとほり。——いや、串戲はよして。いまの並べた傘の小間隙間へ、柳を透いて
日のさすのが、銀の色紙を擴げたやうな處へ、お前さんの其の花について居たらう、蝶が
二つ、あの店へ翔込んで、傘の上へ舞つたのが、雪の牡丹へ、ちらちらと箔が散浮く……
「やぶちゃん注…『小間隙間』それらの並べられた傘と傘との間の、ごくごく僅かな隙間のこと。カメラは非常にゆつ

くりと近づいて柳越しの陽射しという微妙なグラデーションを見事に描き出している。」

其のまゝに見たと思つた時も——箔——すぐ此の寺に墓のある——同町内に、ぐつしよ
りと濡れた姿を儚く引取つた——箔屋——にも氣がつかなかつた。薄情とは言はれまい
が、世帯の苦勞に、朝夕は、細く刻んでも、日は遠い。年月が餘り隔たると、目前の
菊日和も、遠い花の霞になつて、夢の朧が消えて行く。

が、あらためて、澄まない氣がする。御母堂の奥津城を展じたあとで。……ずつと離れ
て居るといゝんだがな。近いと、どうも、此の年でも極りが悪い。きつと冷かすぜ、石塔
の下から、クツクツ、カラカラと先づ笑ふ。」「やぶちゃん注…『奥津城を展じたあと』「これからお京さ
んのお墓参りをした、その後で、きつと」の意。『展墓』という熟語があり、これは「墓に行くこと」、一般的には特に

「盂蘭盆の際に先祖の墓に行つて拜むこと」を指す。」

「こはい、をぢさん。お母さんだがいゝけれど。……私がついて居ますから、冷かしはしませんから、よく、お拜みなさいましよね。」

——（糸塚）さん。」

「糸塚……初路さんか。糸塚は姓なのかね。」

「いゝえ、あら、然う……をぢさんは、ご存じないわね。」

——糸塚さん、糸巻塚ともいふんですつて。

此の谷を一隔てた、向うの山の中に、鬼子母神様のお寺がありませう。」

「あゝ、柘榴寺——眞成寺。」

「一寸ごめんなさい。私も端の方へ、少し休んで。……いゝえ、構ふもんですか。落葉といつても錦のやうで、勿體ないほどですわ。あの柘榴の花の散つた中へ、鬼子母神様の雲だといつて、草履を脱いで坐つたのも、つい近頃のやうですもの。お母さんにつれられて白い雲、青い雲、紫の雲は何様でせう。鬼子母神様は紅い雲のやうに思はれますね。」

墓所は直近いのに、面影を遙かに偲んで、母親を想ふか、お米は恍惚して云つた。「やぶ

ちゃん注…「柘榴寺——眞成寺」[実名でここ](#)（グーグル・マップ・データ航空写真）にある。蓮昌寺の東北二百メー

トルの直近である。日蓮宗妙蓮山眞成寺。加賀藩第三代藩主前田利常が信仰した鬼子母神像を祀る。門前や本堂前に柘

榴（フトモモ目ミソハギ科ザクロ属ザクロ *Punica granatum*）の木が植えてあり、事実、「ざくろ寺」の別名も持つてい

る。鬼子母神は右手に柘榴の枝を持つ。これは、中国と本邦で一部が変更・潤色された鬼子母神伝説によるもので、鬼

子母神は元は鬼女神「可梨帝母」で、人の子どもを拉致しては、それをカニバルしていた。釈迦に諭されて改心したが、

釈迦は「万一、再び子どもを食べたくなつた時は、これを食べるとよい。」と、血の色と人間の肉の味がするとされる

柘榴の実を渡したという因縁に拠る。但し、まさに「[眞成寺](#)」[公式サイトのこちら](#)に書かれているように、これはイン

ドの原典漢訳で「吉祥果」とあつたその果実が、中国では種同定不能であつた。而して日本でも『鬼子母神が手に持つ』

というその実の『正体がわからず』『ザクロ（柘榴）が代用され』たものであり、また、『ザクロの果実は』『その中

に小さい赤い実の中に一つの種を持つ集合体であり』、本邦で『古来より「子宝と豊穣」の象徴とされて』『い』たので、

鬼子母神が手に持つ物体を「ザクロ」として疑いもなく受け入れられたので』あつた、とある通りである。因みに、私

は柘榴が甚だ好きである。』

——聞くとともに、辻町は、其の壯年三四年、相州逗子に過した時、新婚の渠の妻女の、

病厄のために將に絶えなむとした生命を、醫療も且よ。まさしく觀世音の大慈の利驗に生きたことを忘れない。南海靈山の岩殿寺、奥の御堂の裏山に、一處咲満て、春たけなはな白光に、奇しき薫の漲つた紫の堇の中に、白い山兔の飛ぶのを視つつ、病中の人を念じたのを、此の時まさまざと、目前の雲に視て、輝く靈巖の臺に對し、さしうつむくまで、心衷に、恭禮默拜したのである。「やぶちやん注」其の壯年三四年、相州逗子に過した時

鏡花自身の体験を一部に交えている。彼は数え三十歳だった明治三五（一九〇二）年の七月末から九月上旬まで、胃腸病の療養のために、初めての逗子の田越村上桜山（「今昔マップ」）に転地している。この時、三年前に知り合った神楽坂の芸妓桃太郎（本名伊藤すゞ。奇しくも亡母と同名であった）が週に二度ほど宛、世話に来ている。但し、「新婚の渠の妻女の、病厄のために將に絶えなむとした」というのは、自身の不調をズラしたものであり、また、すゞとは、この翌年にかけて同棲中であつたものの、その明治三十六年の四月、病床にあつた師の尾崎紅葉から芸者との關係を激しく叱責され、すゞは一時的に鏡花の家を出ている（但し、実際には秘かに逢い引きしており、明治三六（一九〇三）年（十月）の紅葉の没後、また、晴れて一緒になったのだが、亡き師を永く憚り続け、實際の入籍は、驚くべきことに出逢いから実に二十七年目の、大正一四（一九二五）年（鏡花五十二、すゞ四十四）のことであつた。この間の事情が、明治四〇（一九〇七）年に發表された「婦系圖」の構想に影響を与えていることはよく知られる。さて、話を戻すと、鏡花は三十二になった明治三八（一九〇五）年の夏に、再び胃腸病が悪化し、また、逗子の田越村大字逗子字亀井九百五十七番地に転地療養している。一夏の予定だったものが、実に逗子滞留は約四年に及んだ。この時、かの名作「春晝」「春晝後刻」を生んだことは、既に私の二作のカップリング版の注で子細に注した。ここに出る「岩殿寺」も、そちらで重要なロケ地となる「久能谷の觀音堂」のモデルで、泉鏡花が逗子住まいの折り、しばしば杖を引いた逗子市久木にある曹洞宗海雲山岩殿寺のことである。同じく詳細注を既に記してあるので参照されたい。」

お米の横顔さへ、朧たけて、

「柘榴寺、ね、をぢさん、彼處の寺内に、初代元祖、友禪の墓があります。一頃は訪ふ人どころか、苔の下に土も枯れ、水も涸いて居たんですが、近年他國の人たちが方々から尋ねて来て、世評が高いもんですから、記念碑が新しく建ちましてね、名所のやうに成りました。それでね、こゝのお寺でも、新規に、初路さんの、矢張り記念碑を建てる事になつたんです。」「やぶちやん注」初代元祖、友禪の墓」柘榴寺鬼子母神真成寺の東北に隣接している、曹

洞宗祥雲山龍國寺（宝円寺八世虎白大和尚が初代利家の所持札を封じ込めた稲荷神を祀るために建立した寺）で、大正

九（一九二〇）年になって加賀友禪を完成させたとされる宮崎友禪の墓碑が発見されている。宮崎友禪（承応三（一六五四）年～元文元（一七三六）年）は能登国の穴水で生まれ、元禄年間（一六八八年～一七〇三年）を中心に京都で活躍した扇絵師で、着物の「友禪模様」という名称の基になった扇絵や、小袖の雛形を描いた来歴不明の僧で、友禪斎とも号した。[当該ウィキペディア](#)を見られたいが、そこには、この墓碑には否定説もあるとある。」

「はゝあ、和尚さん、娑婆氣だな、人寄せに、黒梓で……と身を投げた人だから、薄彩色水繪具の立看板。」

「黙つて。……いゝえ、お上人よりか、檀家の有志、縣の勸光會の表向きの仕事なんです。お寺は地所を貸すんです。」

「葬つた土とは別なんだね。」

「えゝ、それで、糸塚、糸巻塚、どつちにしようかつていつてるところ。」

「どつちにしろ、友禪の（染）に對する（糸）なんだらう。」

「そんな、たゞ思ひつき、趣向ですか、そんなんぢやありません。あの方、はんけちの工場へ通つて、縫取をしていらしつてき、それが原因で、あんな事になつたんですもの。」

糸も紅糸からですわ。」

「糸も紅糸と……はんけちの工場へ通つて、縫取をして、それが原因？……」

「まあ、何にも、ご存じない。」

「怪我にも心中だなどといふ、然ういつちや、しかし濟まないけれども、何にも知らない。おなじ寫眞を並んで取つても、大勢の中だと、いつとなく、生別れ、死別れ、年が經つと、其つ切になる事もあるからね。」

辻町は向直つていつたのである。

「蟹は甲らに似せて穴を掘る……も可訝いかな。おなじ穴の狸……飛んでもない。一升入の瓢は一升だけ、何しろ、當推量も左前だ。誰もお極りの貧のくるしみからだと思つて居たよ。」

また、事實然うであつた。

「まあ、然うですか、いふのもお可哀相。あの方、それは、おくらしに賃仕事をなすつたでせう。けれど、もと、千五百石のお邸の女臈さん。」

「おゝ、ざつとお姫様だ。あゝ、惜しい事をした。あの晩一緒に死んで置けば、今頃はう

まれかはつて、小いろの一つも持った果報な男に成つたらう。……絲も、紅絲は聞いても床しい。」「やぶちゃん注…「小いろ」「小色」。ちよつとした情事・色事。」「

「それどころぢやありません。其の絲から起つた事です。千五百石の女臈ですが、初路さん、お妾腹だつたんですつて。それでも一粒種、いゝ月日の下に、生まれなすつたんですけれど、廢藩以來、ほどなく、お邸は退轉、御兩親も皆あの世。お部屋方の遠縁へ引取ひられなさいましたのが、いま、お話のありました箔屋なのです。時節がら、箔屋さんも暮しが安易でないために、工場通ひをなさいました。お邸育ちのお慰みから、縮緬細工もお上手だし、お針は利きます。すぐ第一等の女工さんで極上等のものばかり、はんけちと云つて、薄色もありませうが、おもに白絹へ、蝶花を綺麗に刺繡をするんですが、いゝ品は、國産の譽れの一つで、内地より、外國へ高級品で出たんですつて。」「

「成程。」「

四

あれあれ見たか

あれ見たか

……………

「あれあれ見たか、あれ見たか。二つ蜻蛉が草の葉に、かやつり草に宿をかりて……其の唄を、工場で唱ひましたつてさ。唄が初路さんを殺ころしたんです。」「

細い、かやつり草を、青く縁へとつて、其の片端、はんけちの雪のやうな地へ赤蜻蛉を二つ。」「

お米の二つ折る指がしなつて、内端に襟をおさへたのである。」「

「一ツづゝ、蜻蛉が別ならよかつたんでせうし、外の人の考案で、あの方、たゞ刺繡だけなら、何でもなかつたと言ふんです。どの道、うつくしいのと、仕事の上手なのに、嫉み猜みから起こつた事です。何につけ、彼につけ、ゆがみ曲りに難癖をつけないでは措きません。處を圖案まで、あの方がなさいました。何から思ひつきなすつたんだか。――その赤蜻蛉の刺繡が、大層な評判だし、分けて輸出さきの西洋の氣受けが、それは、凄い勢、

どしどし註文が來ました處から、外國まで、恥を曝すんだつて、羽をみんな、手足に
て、紅いのを縮緬のやうに唄ひ囃して、身肌を見せたと、騒ぐんでせう。」

（巻初に記して一粲に供した俗諺には、二三行、

.....
.....

脱落があるらしい、お米が口誦を憚つたからである。）「やぶちゃん注…「一粲」原義は「灯火の
光り輝くさま・一燦」であるが、ここは、「一粲」は「白米」の意があり、「清く白い」の義から転じて、「白い齒を見せ
て笑う」ところから、「一笑い・笑いを誘う材料・一笑」の意である。こうした作品内でブレイクして挿入する注記
というのは、所謂、「都市伝説」に於ける、あたかも事実としてあつたかのような記述として、幻想小説に於いては
極めて効果的な手法であることを見逃してはならない。ここで鏡花が含ませたのは、恐らく蜻蛉の交尾に纏わる言い掛
けであろうことは容易に想像出来るし、そう読者が感じるように、鏡花は以下でも辻町の台詞を通して示唆しているの
である。」

「いやですわね、をぢさん、蝶々や、蜻蛉は、あれは衣服を着て居るでせうか。

——人目のふと思へども

羽はうすもの隠されぬ——

それも一つならまだしもだけれど、一つの尾に一つが續いて、すつと、あの、羽を八つ、
靜かに銀絲で縫つたんです、寢て居やしません、飛んでゐるんですわね。えゝ、それをで
すわ、

——世間、いなづま目が光る——

——恥を知らぬか、恥ないか——と皆でわあわあ、さも初路さんが、そんな姿繪を、紅
い毛、碧い目にまで、露呈に見せて、お寶を儲けたやうに、唱ひ立てられて見た日には、
内氣な、優しい、上品な、着ものの上から觸られても、毒蛇の牙形が膚に沁みる……雪に
咲いた、白玉椿のお人柄、耳たぶの赤くなる、もうそれが、碎けるのです、散るのです。

遺書にも、あつたさうです。——あゝ、恥かしいと思つたばかりに——」

「察しられる、思ひやられる。お前さんも聞いて居ようか。むかし、正しい武家の女性た
ちは、拷問の答、火水の責にも、斷じて口を開かない時、唯、衣を褫ふ、肌着を剥ぐ、
裸體にするといふとともに、直ちに罪に落ちたといふんだ。——そこへ掛けると……」

辻町は、かくも心弱い人のために、西班牙セビイラの煙草工場のお轉婆を羨んだ。

同時に、お米の母を思つた。お京がもし其の場に處したら、對手の工女の顔に象棋盤の目を切るかはりに、酢ながら心太を打ちまけたらう。「やぶちゃん注」：西班牙セビイラの煙草工場

のお轉婆」言わずもがな、フランスの作曲家ジョルジュ・ビゼー（Georges Bizet 一八三八年～一八七五年）が作曲したオペラ「カルメン」（Carmen：一八七五（明治八）年・パリ初演）のヒロインで、スペインのアンダルシアのセビリア（Sevilla：ネイティヴの音写だと「セビイリヤ」）の煙草工場で働くロマ族（旧称「ジプシー」）は明らかな差別用語であるので使用は避けたい。但し、旧「ジプシー」の中には「ロマ族」ではないとして、その呼称で一括りにされることに異を唱える人々もいるとも聞いている）の女工カルメンを指す。」

「そこへ掛けると平民の子はね。」

辻町は、うつかりいつた。

「だって、平民だって、人の前で。」

「いゝえ。」

「えゝ、どうせ私は平民の子ですから。」

辻町は、其の乳のわきの、青い若菜を、ふと思つて、覺えず肩を縮めたのである。

「あやまつた。いや、しかし、千五百石の女蔭、昔ものがたり以上に、あはれにはかない。而うして清らかだ。」

「中將姫のやうでしたつて、白羽二重の上へ、沁ると、あの方、白い指が消えました。露が光るやうに、針の尖を傳つて、薄い胸から紅い絲が揺れて染まつて、また膝つて、銀の絲がきらきらと、何枚か、幾つの蜻蛉が、すいすいと浮いて寫つる。——（私が傍に見て居ました）つて、鼻ひしやげの其の頃の工女が、茄子の古漬のやうな口を開けて、若い年で話すんです。その女だって、その臭い口で聲を張つて唱つたんだと思ふと、聞いて居て、口惜しい、睨んでやりたいやうですわ。——でも自害をなさいました、後一年ばかり、一時は此の土地で湯屋でも道端でも唄つて、お氣の弱いのをたつとむまでも、初路さんの刺繡を恥かしい事にいひましたとき。」

——あれあれ見たか、あれ見たか——、銀の羽がそのまゝ手足で、二つ蜻蛉が何とかですもの。「やぶちゃん注」：「中將姫」奈良当麻寺に伝わる曼荼羅を織つたとされる伝説上の女性。横佩大臣藤

原豊成の娘。天平年間（七二九年～七四九年）に当麻寺に入山し、仏行に励んだ姫は、その徳により仏に邂逅し、一晚

のうちに蓮華の糸で曼荼羅を織り上げ、極楽往生したと伝えられる。姫の出家の動機を、後妻による「継子いじめ」

の物語とした歌舞伎・浄瑠璃・謡曲などが知られる（以上は小学館「日本国語大辞典」の記載を元にした。詳しくは当該ウィキペディアがよい。）」

「一體また二つの蜻蛉が何故變だらう。見聞が狭い、知らないんだよ。土地の人は——然ういふ私だつて、近頃まで、つい氣がつかずに居たんだがね。」

手紙の次手で知つておいでだらうが、私の住んで居る處と、京橋の築地までは、然うだね、此處から、ずつと見て、向うの海まではあるだらう。今度、當地へ來がけに、齒が疼んで、馴染の齒科醫へ行つたとお思ひ。その築地は、といふと、用たして、齒科醫は大廻りに赤坂なんだよ。途中、四谷新宿へ突抜けの麴町の大通りから三宅坂、日比谷……銀座へ出る……歌舞伎座の前を眞直に、目的の明石町までと饒舌つてもいゝ加減の間、町充滿、屋根一面、上下、左右、縦も横も、微紅い光る雨に、花吹雪を浮かせたやうに、羽が透き、身が染まつて、數限りもない赤蜻蛉の、大流れを漲らして飛ぶのが、行違つたり、丑に舞亂れたりするんぢやあない、上へ斜、下へ斜、右へ斜、左へ斜といった形で、おなじ方向を眞北へさして、見當は淺草、千住、それから先は何處までだか、幾ど想像にも及びません。——明石町は晝の不知火、隅田川の水の影が映つたよ。「やぶちやん注……私の住んで居る處と、京橋の築地までは、然うだね、此處から、ずつと見て、向うの海まではあるだらう」鏡花は明治四三（一九一〇）年五月に麴町区下六番町十一番地（現在の千代田区六番町五番。グーグル・マップ・データ）に転居し、六月二十七日には本籍地をそこに移し、而して、そこが終の住処となつた（笠原伸夫「泉鏡花エロスの繭」（一九八八年国文社刊）の年譜に拠つた）。ここから築地までを調べると、直線で四・五キロメートルほどである。一方、蓮昌寺から海岸線までは七・五キロメートルはある。しかし、こちらは開けた平野で、遮る建築物は帝都東京のごちゃついた感じに比べると、距離感遙かに短めに感じるであろうから、違和感はないと私は思う。

「明石町」現在の中央区明石町。聖路加病院のあるところ。「今昔マップ」で当時の地図と並べて見せよう。築地の隅田川に面した側が同町。当時は「京橋區」であつた。」

で、急いで明石町から引返して、赤坂の方へ向ふと、また、おなじやうに飛んで居る。群れて行く。齒科醫で、椅子に掛けた。窓の外を、此の時は、幾分か、其の數はまばらに見えたが、それでも、千や二千ぢやない、二階の窓をすれすれの處に向ふ家の廂見當、丁ど電信、電話線の高さを飛ぶ。それより、高くもない。ずつと低くもない。どれも、お

なじくらゐな空を通るんだがね、計り知られない其の大群は、層を厚く、密度を濃かにしたのぢやなくつて、薄く透通る。其の一つ一つの薄い羽のやうにさ。

何の事はない、見た處、東京の低い空を、淡紅一面の紗を張つて、銀の霞に包んだやうだ。聳立つた、洋館、高い林、森なぞは、さながら、夕日の紅を卷いた白浪の上の巖の島と云つた態だ。

つい口へ出た。(蜻蛉が大層飛んで居ますね。) 齒科醫が(はあ、早朝からですよ。)と言つたがね。其の時は四時過ぎです。

歸途に、赤坂見附で、同じことを、運轉手に云ふと、(今は少くなりました。こんなもんどやありません。今朝六時頃、此の見附を、客人で通りました時は、上下、左右すれ違ふとサワサワと音がします。青空、青山、正面の雪の富士山の雲の下まで裾野を蔽ふといひます紫雲英のやうに、いつぱいです。赤蜻蛉に乘せられて、車が浮いて困つてしまひました。こんな経験はじめてです。)と更めて吃驚したやうに言ふんだね。私も、その日ほど夥しいのは始めてだつたけれど、赤蜻蛉の群の一日都會に漲るのは、秋、おなじ頃、幾ど毎年と云つてもいい。子供のうちから大好きなだけで、これに氣のついたのは、——うつかりぢやないか——此の八九年以來なんだが、月ばかりありません。きつと十月、中の十日から二十日の間、三年つゞいて十七日といふのを、手帳につけて覚えて居ます。季節、天氣といふものは、そんなに模様の變らないものと見えて、いつの年も秋の長雨め、しけつゞき、また大あらしのあつた翌朝、からりと、嘘のやうに青空になると、待つてたやうに、しづめたり浮いたり、風に、すらすらすらすると、薄い紅い霧をほぐして通る。

——此の邊は、何うだらう。」

「え。」

話にきゝとれて居た所爲ではあるまい、お米の顔は緋葉の蔭にほんのりして居た。

「……もう晚いでせう、今日は一つも見えませんわ。前の月の命日に參詣をしました時、山門を出て……あら、このいゝ日和にむら雨かと思ひました。赤蜻蛉の羽がまるで銀の雨の降るやうに見えたんです。」

「一ツづゝかね。」

「ひとツづゝ？」

「二ツづゝではなかつたかい。」

「さあ、それはどうですか、一寸私氣が付きません。」

「氣がつくまい、然うだらう。それを言ひたかつたんだ、いまの蜻蛉の群の話は。それがね、残らず、二つだよ、比翼なんだよ。其の刺繡の姿と、おなじに、此を見て土地の人は、初路さんを殺したやうに、どんな唄を唱ふだらう。」

みだらだの、風儀を亂すの、恥を曝すのといつて、何うする氣だらう。浪で洗へますか、火で焼けますか、地震だつて壊せやしない。天を蔽ひ地に漲る、といった處で、颱風があれば消えるだらう。儂いものではあるけれども――あゝ、その儂さを一人で身に受けたのは初路さんだね。」

「えゝ、ですから、ですから、をぢさん、其のお慰めかたがた……今では時世がかはりました。供養のために、初路さんの手技を稱め贊へようと、それで、「糸塚」といふ記念の碑を。」

「……………」

「もう、出来かゝつて居るんです。圖取は新聞にも出て居ました。臺石の上へ、見事な白い石で大きな絲柰を据ゑるんです。刻んだ絲を巻いて、丹で染めるんだつていふんですわ。」

「其處で、「友禪の碑」と、對するのか。しかし、いや、兎に角、悪い事ことではない。場所は、位置は。」

「さあ、行つて見ませう。半分うへ出来て居るやうです。門を入つて、直きの場所です。」辻町は、あの、孟蘭盆の切籠燈に對する、寺の會釋を傳へて、お京が渠に戯れた紅絲を思つて、ものに手繰られるやうに、提灯とともにふらりと立つた。

五

「おばけの……蜻蛉？……をぢさん。」

「何、そんなものの居よう筈はない。」

と然も落着いたらしく、聲を沈めた。其の癖、唯た今、思はず、「呀！」といったのは誰だらう。

いま辻町は、蒼然として苔蒸した一基の石碑を片手で抱いて——いや、抱くなどといふのは憚からう——霜より冷くつても、千五百石の女蔦の、石いしの軀ともいふべきものに手を添へて居るのである。たゞし、その上に、沈んだ藤色のお米の羽織が袖をすんなりと墓のなりにかゝつた、が、織だか、地紋だか、影繪のやうに細い柳の葉に、菊らしいのを薄色に染出したのが、白い山土に敷亂れた、枯草の中に咲残つた、一叢の嫁菜の花と、入交ぜに、空を蔽うた雑樹を洩れる日光に、幻の影を籠めた、墓はさながら、梢を落ちた、うらがなしい綺麗な錦紗の燈籠の、うつむき伏した風情がある。「やぶちゃん注：『嫁菜』

狭義には、種としてのキク亜綱キク目キク科キク亜科シオン属ヨメナ *Aster yomena* を指すが、[ウィキペディアの「ヨメナ」](#)によれば、『よく似た姿のキク類は他にもいくつかあり、一般にはそれらをまとめてヨメナと呼んでいることが多い。いわゆる野菊に類するものである』とある。また、『若芽を摘んで食べる。古くは万葉集の時代から使われていたよう』『「おはぎ」或いは「うはぎ」と呼ばれている。ヨメナご飯などにも有名。名前の由来は嫁菜とも夜目菜とも言われ、はつきりしない。一説には、美しく優しげな花を咲かせるため「嫁」の名がつくといわれている』。『なお、のぎくをヨメナの別名とする記述が国語辞典関連ではよく見られる』が、植物図鑑ではヨメナの別名としてノギクを挙げた例はない』と記す。」

こゝは、切立といふほどではないが、巖組みの徑が嶮しく、碎いた薬研の底を上る、涸れた瀧の痕に似て、草土手の小高い處で、累々と墓が並び、傾き、又倒れたのがある。上り切つた卵塔の一劃、高い處に、裏山の峰を抽いて繁つたのが、例の高燈籠の大榎で、巖を縫つて蟠つた根に寄つて、先祖代々とともに、お米のお母さんが、ぱつと目を開きさうに眠つて居る。其處も蔭で、薄暗い。

それ、持參の晝提灯、土の下から嘸ぞ、半間だと罵倒しようが、白く据つて、ぼつと包んだ線香の煙が靡いて、裸蠟燭の灯が、靜寂な風に、ちらちらする。

榎を潜つた彼方の崖は、すぐに、大傾斜の窪地になつて、山の裾まで、寺の裏庭を取りまはして一谷一面の卵塔である。

初路の墓は、お京のと相向むかつて、やゝ斜下、左の草土手の處にあつた。

見たまへ——お米が外套を折疊みにして袖に取つて、背後に立添つた、前踞みに、辻町は手を其の石碑にかけた羽織の、裏の媚かしい中へ、さし入れた。手首に冴えて淡藍が映える。片手には、頑丈な、錆の出た、木鋏を構へて居る。

此の大剪刀が、もし空の樹の枝へでも引掛つて居たのだと、うつかり手にはしなかつたらう。孟蘭盆の夜が更けて、燈籠が消えた時のやうに、羽織で包んだ初路の墓は、あはれにうつくしく、且つあたりを籠めて、陰々として、鬼氣が籠るのであつたから。

鋏は落おちて居た。これは、寺男の爺やまじりに、三人の日傭取が、ものに驚き、泡を食つて、遁出すのに、投出したものであつた。

其の次第は恁うである。

はじめ二人は、磴から、山門を入ると、廣い山内、鐘樓なし。松を控へた墓地の入口の、鎖さない木戸に近く、八分出来といふ石の塚を視た。臺石に特に意匠はない、つい通りの巖組一丈餘りの上に、詭への杵を置いた。が、あの、くるくると糸を廻す棒は見えぬ。くり抜いた跡はあるから、此には何か考案があるらしい。お米もそれはまだ知らなかつた。杵の四つの柄は、其の半面に對しても幸に鼎に似ない。鼎に似ると、烹るも烙くも、いづれ纖楚い人のために見る目も忍びないであらう處を、恰好、玉を捧ぐる白珊瑚の滑かなる枝に見えた。「やぶちゃん注：『纖楚い』『纖』（音「セン」）は「細い・ほっそりとした」の意で、『楚』も同義だが、私はこの熟語を見たことはない。』

「かへりに、ゆつくり拜見しよう。」

その母親の展墓である。自分からは急がすのをためらつた案内者が、

「道が悪いんですから、氣をつけてね。」

わあ、わつ、わつ、わつ、おう、ふうと、鼻呼吸を吹いた面を並べ、手を擧げ、胸を敲き、拳を振りなど、なだれを打ち、足たぐらを踏んで、一時に四人、摺違ひに木戸口へ、茶色になつて湧いて出た。

其の聲も跫音も、響くと、もろともに、落ちかゝつたばかりである。

不意に打つかりさうなのを、軽く身を抜いて路を避けた、お米の顔に、鼻をまともに突向むけた、先頭第一番の爺が、面も、脛も、一縮みの皺の中から、ニンガリと變に笑つたと思ふと、

「出たじえゝ、幽霊だあ。」

幽霊。

「おツさん、蛇、蝮？」

お米は——幽霊と聞いたのに——一寸眉を蹙めて、蛇、蝮を憂慮つた。

「那樣なもんぢやねえだア。」

如何いかにも、那樣なものには怯えまい、面魂、印半纏も交つて、布子のどんつく、半股引、が入亂れ、屈竟な日傭取が、早く、絲塚の前を摺抜けて、松の下に、ごしやごしやとかたまつた中から、寺爺やの白い眉の、びくびくと動くが見みえて、

「蜻蛉だあ。」

「幽霊蜻蛉ですだアい。」

と、冬の麥稈帽を被つた、若いのが聲を掛けた。「やぶちゃん注：『布子のどんつく』は「鈍付く布子」のこと。糸が太くて節の多い木綿地で作つた綿入れのこと。」

「蜻蛉なら、幽霊だつて。」

お米は、莞爾して坂上りに、衣紋のやゝ亂れた、浅黄を雪に透く胸を、身繕ひもせず、そのまま、見返りもしないで木戸を入つた。

巖は鋭い。踏上げる徑は嶮しい。が、お米の雙の爪さきは、白い蝶々に、をぢさんを載せて、高く導く。

「何だい、今は、あれは。」

「久助つて、寺爺やです。卵塔場で働いて居て、休みのお茶のついでに、私をからかつたんでせう。子供だと思つて居る。をぢさんがいらつしやるのに、見さかひがない。馬鹿だよ。」

「若いお前さんと、一緒にからかはれたのは嬉しいがね、威かすにしても、寺で幽霊をいふ奴があるものか。それも蜻蛉の幽霊。」

「蛇や、蝮でさへなければ、蜥蜴が化けたつて、そんなに可恐いもんですか。」

「居るかい。」

「時々。」

「居るだらうな。」

「でも、此の時節。」

「よし、私だつて驚かない。しかし、何だらう、あゝ、然うか。おはぐろとんぼ、黒とんぼ。また、何とかいつたつけ。漆のやうな眞黒な羽のひらひらする、織く青い、たしか河原蜻蛉とも云つたと思ふが、あの事ぢやないかね。」

「黒いのは精靈蜻蛉ともいひますわ。幽霊だなんのつて、あの爺い。」「やぶちゃん注：「はぐろとんぼ」「黒とんぼ」「漆のやうな眞黒な羽のひらひらする、織く青い、たしか河原蜻蛉とも云つた」「黒いのは精靈蜻蛉」現在でも通称で「幽霊とんぼ」と呼ばれるものがある。これは、所謂、糸蜻蛉の一種で、翅が見るから

に黒い「羽黒蜻蛉」、トンボ目イトトンボ亜目カワトンボ上科カワトンボ科カワトンボ亜科アオハダトンボ属ハグロトンボ *Calopenya atata* を指すことが多いようである。[ウィキペディアの「ハグロトンボ」](#)によれば、『成虫の体長は』約

五・七センチメートル、後翅長は三・五から四・四センチメートル『ほどで、トンボとしてはやや大型。雌の方が雄より若干大きいが、大差はない。翅が黒いのが特徴で、斑紋はなく、体色が全体的に黒く』『緑色の金属光沢があるのに対し、雌は黒褐色である。他のトンボのように素早く飛翔したり』『ホバリングしたりせず、チョウのようにひらひらと舞うように羽ばたく。その際、パタタタ……と翅が小さな音を立てる。どこかに留まって羽根を休める際も』『チョウのように羽根を立てた状態で、四枚の羽根を重ねて閉じるという特徴がある』『。『成虫は』五月から十月『頃まで見られ、とくに』七月から八月に『多い。主に平地から低山地のヨシなどの』挺水植物（水深約〇・五―一・二メートルの浅い水中に植生し、根は水底の土壌中にあつて、葉や茎が水上に出ている植物。例えばガマやハスなど）や、『エビモ、バイカモなどの沈水植物などが茂る緩やかな流れに生息する。幼虫は、おもに夜半から早朝にかけて、挺水植物などに定位して』六―七月『頃に羽化する。羽化後の若い個体は薄暗いところを好み、水域から離れて林の中で生活するが、成熟すると』『。『再び水域に戻り、明るい水辺の石や植物などに止まり』『。『縄張りを張る。交尾後、雌は水面近くの水中植物に産卵する』とある。無論、以上から、本篇の私が推定した現在時制（十一月中・下旬）では本種は見られないし、そもそも水辺でない現ロケーションもフィールドとしてもおかしいことから、ハグロトンボではないことは自明である。なお、『**精靈蜻蛉**』については、本篇の最終注で考証してあるので、読後に読みたい。』

爾時であつた。

「あゝ。」

と、お米が聲を立てると、

「酷いこと、墓を。」

といった。聲とともに、着た羽織をすつと脱いだ、が、紐を何う解いたか、袖を何う、

手の菊へ通したか、それは知らない。花野を颯と靡かした、一筋の風が藤色に通るやうに、早く、其の墓を包んだ。

向う傾けに草へ倒して、ぐるぐる巻といふよりは、がんじ搦みに、ひしと荒縄の汚いのを、無残にも。

「初路さんを、——初路さんを。」

これが女臈の碑だつたのである。

「莫塵にも、蓆にも包まないで、まるで裸にして。」

と氣色ばみつつ、且つ恥ぢたやうに耳朶を紅くした。

いふまじき事かも知れぬが、辻町の目にも咄嗟に印したのは同じである。臺石から取つて覆へした、持扱ひの荒くれた爪摺れであらう、青々と苔の蒸したのが、處々耖られて、日の隈幽に、石肌の浮いた影を膨らませ、影を又凹ませて、残酷に搦めた、さながら白身の褰れた女を、反接緊縛したに異ならぬ。「やぶちやん注…「反接」後ろ手に縛ること。」

推察に難くない。いづれかの都合で、新しい絲塚ために、この位置を動かして持運ばうとしたらしい。

が、心ない仕業を何うする。——お米の羽織に、然うして、墓の姿を隠して好かつた。花やかともいへよう、ものに激した舉動の、此のしつとりした女房の人柄に似ない捷い仕種の思掛けなさを、辻町は怪しまず、然もありさうな事と思つたのは、お京の娘だからであつた。こんな場に出逢つては、きつとおなじはからひをするに疑ひない。そのかはり、娘と違ひ、落着いたもので、澄まして羽織を脱ぎ、背負揚を棄て、悠然と帶を巖に解いて、あらはな長襦袢ばかりになつて、小袖ぐるみ墓に着せたに違ひない。

何、夏なら、炎天なら何とする？……と。然ういふ皮肉な讀者には弱る、が、言はねば卑怯らしい、裸體になります、然らずんば、辻町が裸體にされよう。

——其の墓へは先づ詣でた——

引返して來たのであつた。

辻町の何よりも早くこゝで爲よう心は、立處に繩を切つて棄てる事であつた。瞬時と雖も、人目に曝すに忍びない。行るとなれば手傳はう、お米の手を借りて解きほどこきなどするのにも、二人の目さへ當てかねる。

さしあたり、ことわりもしないで、他の勞業を無にするといふ遠慮だが、その申譯と、渠等を納得させる手段は、酒と餅で、そんなに煩はしい事はない。手で招いても澁面の皺は伸びよう。また庫裡で心太を突くやうな跳梁權を獲得して居た、檀越夫人の嫡女がこゝに居るのである。

栗柿を剥く、庖丁、小刀、そんなものを借りるのに手間ひまはかゝらない。

大剪刀が、恰も蝙蝠の骨のやうに飛んで居た。

取つて構へて、些と勝手は悪い。が、縄目は見る目に忍びないから、衣を掛けた此のまゝ、留南奇を燻く、繪で見た伏籠を念しながら、もろてを、づかと袖裏へ。驚破、ほんのりと、暖い。芬と薰をつた、石の肌の軟かさ。「やぶちゃん注」『留南奇』『春晝後刻』の第三十六」章にも出て既注であるが、再掲すると、「留木」のこと。香木を焚いて、その香りを、衣服や髪に移すこと、及び、その移り香を言う。」

思はず、

「呀。」
と聲を立てたのであつた。

「――おばけの蜻蛉、をちさん。」

「――何そんなものの居よう筈はない。」

胸傍の小さな痣、この青い藓、そのお米の乳のあたりへ鉄が響さうだつたからである。辻町は一禮し、墓に向つて、屹といった。

「お嬢さん、私の仕業が悪かつたら、手を、怪我をおさせなさい。」

鉄は爽な音を立てた、ちゝろも聲せず、松風を切つたのである。「やぶちゃん注」『ちゝろ』

その鳴き声に由来する蟋蟀類（私は直翅（バッタ）目剣弁（キリギリス）亜目コオロギ上科コオロギ亜科 Gryllinae に属する種群を「コオロギ類」と考えている。その根拠については、『和漢三才圖會卷第五十三 蟲部 蟋蟀（こほろぎ）』の私の注の頭を読みたい）の古名。」

「やあ、塗師屋様、――ご新姐。」

木戸から、寺男の皺面が、墓地下で口をあけて、もう喚き、冷めし草履の馴れたもので、これは碯确たる徑は踏まない。草土手を踏んで横ざまに、傍へ來た。「やぶちゃん注」『冷めし』

草履ざうり「冷飯草履」で、緒も台も総て藁作つた粗末な草履を指す。「硃确かうかくたる」現代仮名遣「こうかくたる」。「地味が

痩せており、小石などが多いさま」を言う語。」

續ついでいて日傭取ひようとりが、おなじく木戸口きどぐちへ、肩かたを組合くみあつて低く出た。

「ごめんなせえましよ、お客様きやくぐさま。……ご機嫌きげんよくかうやつてござらつしやる處ところを見ると、間違まちがえごともなかつたの、何も、別條べつじょうはなかつたどね。」

「處ところが、おつさん、少々別條せうせうべつじょうがあるんですよ。きみたちの仕事しごとを、一寸無駄ちよつとむだにしたぜ。

一杯買いっばいはう、これです、ぶつぶつに繩なはを切拂きつぱらつた。」

「はい、これは、はあ、いゝ事をさつせえて下さりました。」

「何なんだか、あべこべのやうな挨拶あいさつだな。」

「いんね、全くいゝ事をなさせえました。」

「いゝ事をなさいましたぢやないわ、おいたはしいぢやないの、女じやうらふ藤さんがさ。」

「ご新姐しんぞ、それがね、いや、この、から繩なは、畜生ちくしやう。」

其處そこで、踞かじんで、毛蟲けむしを踏潰ふみつぶしたやうな爪つまさきへ近く、切きれて落おちた、むすびめの節立ふしだつた荒繩あらなはを手繰たぐり棄すてに背後うしろへ刎出はねだしながら、きよろきよると樹きの空そらを見廻みまはした。

妙なもので、下木戸したきどの日傭取ひようとりたちも、申合まをしあせたやうに、揃そろつて、踞かじんで、空そらを見る目めが、皆動みなうごく。

「いゝ鹽梅あんばいに、幽靈蜻蛉いうれいとんぼ、消えたどかな。」

「一體何いったいなんだね、それは。」

「もの、それがでござりますよ、お客様きやくぐさま、此この、はい、石塔せきたふを動かうごかすにつきましただ。」

「いづれ、あの糸塚いとづかとかいふのについての事ことだらうが、何かね、掘返ほりかへしてお骨こつでも。」

「いや、それは成なりましたねえ。記念碑發起押きねんひほつきおつぽだての、帽子ぼうし、靴くつ、洋服やうふく、袴はかま、髻ひげの生え
た、ご連中れんぢゆうさ、其そのつもりであつたれど、寺てらの和尚様をしようさま、承知しやうちさつしやりましたねえだ。もの
これ、三十年経ねんたつたとこそいへ、若い女わか藤じやうらふが埋うまつてゐるだ。それに、久ひさしい無縁墓むえんぼかだで、こ
とわりいふ檀家だんかもなしの、立合たちあつてくれる人ひとの見分けんぶんもないで、と一論判ひとらつぱんあつた上で、土つちに
は觸さらねえ事ことになつたでがす。」

「然さうあるべき處ところだよ。」

「處ところで、はい、あのさ、石彫いしぼりの大え絲梓いとわくの上うへへ、がつしりと、立派りつぱなお堂だうを据すゑて戸とをあ

けたてしますだね、その中へ此の……」

お米は着流しのお太鼓で、まことに優に立つて居る。

「おゝ、成佛をさつしやるづら、しをらしい、嫁菜の花のお羽織きて、霧は紫の雲のやうだ、しなしなとしてや。」

と、苔の生えたやうな手で撫でた。

「あゝ、撥つたい。」

「何ですうい。」

と、何も知らず、久助は墓の羽織を、もう一撫で。

「此の石塔を齋き込むくろみだ。その堂がもう出来て、切組みも済ましたで、持込んで寸法をきつちり合はす段が、はい、こゝは此の通り足場が悪いと、山門内まで運ぶについて、今日さ、此の運び手間だよ。肩がはりの念入りで、丸太棒で擔ぎ出しますに。――

丸太棒めら、丸太棒を押立てて、ごらうじませい、彼處にとぐろを巻いて居ますだ。あのさきへ矢羽根をつけると、掘立普請の齋が出るだね。へい、墓場の入口だ、地獄の門番：

…はて、飛んでもねえ、肉親のご新姐ござらつしやる。」「やぶちゃん注…「齋き込むくろみ」「齋」

は本来は神を祀る斎場を指すが、ここは初路の遺骨なき靈堂として「糸塚」堂をやおら建てて、辻町も先に言つたやうに、娑婆つ氣たつぷりと参詣者を呼び込むという目論見をかく皮肉に久助に語らせているのである。「丸太棒」次の台詞で判るが、これは実際の丸太とともに、日雇い人夫らに対する卑称でもあり、久助の台詞ではそれが混在するの注意が必要である。「掘立普請の齋」靈廟建立起工の法事。」

と、泥でまぶしさうに、口の端を拳でおさへて、「やぶちゃん注…「泥でまぶしさうに」泥のついた拳で口の端を押さえた結果、あたかも泥を口の辺りに塗すかのように見えた、というのであらう。」

「――そのさ、擔ぎ出しますに、石の直肌に繩を掛けるで、藁なり蓆なりの、花ものの草木を雪圍ひにしますだね、あの骨法でなくば悪かんべいと、お客様の前だけんど、わし一應はいうたれども、丸太棒ら。あに、はい、墓さ苞入に及ぶもんか、手間障だ。また誰も見て居ねえで、構ひごとねえだ、と吐いての。」

和尚様は今日は留守なり、お納所、小僧も、總齋に出さしつた。まづ大事ねえでの。はい、ぐるぐるまきのがんじがらみ、や、このしよで、轉がし出した。それさ、其の形でがすよ。わしき屈腰で、膝はだかつて、面を突出す。奴等三方からかぶさりかゝつて、棒を

突きさうと思はつせえまし。何と、此の鼻の先、奴等の目の前へ、縄目へ浮いて、羽さ弾いて、赤蜻蛉が二つ出た。「やぶちゃん注…『總齋』見たことがない熟語である。小学館「日本国語大辞典」に単なる「仏事」「法事」の意を挙げてあるが、それを、わざわざこの二字熟語で示すのはおかしい。一つだけ、『ブリタニカ国際大百科事典』の「齋」（読みは「とき」ではない）の解説の中に、『仏教の戒律の規定に従って月の十五『日と』三十『日に』、『同一地域の僧が集って』、『自己反省をする集会などを意味する』とあったので、それですておくこととする。さすれば、事務方の納所坊主はおろか、小僧に至るまで、皆、出払っているというのが、不自然でなく感じられるからである。」

たつた今や、それまでといふものは、四人八ツの、團栗目に、糠蟲一疋入らなんだに、かけた縄さ下から潜つて石から湧いて出たは何うしたもんだね。やあやあ、しつしつ、吹くやら、拂ひますやら、静として赤蜻蛉が動かねえとなると、はい、時代違ひで、何の氣もねえ若徒も、さて此の働きに掛つて見れば、記念碑糸塚の因縁さ、よく聞いて知つてるもんだで。「やぶちゃん注…『糠蟲』幾つかの特定種の異名としてあるが、ここは、所謂、微細な米糠ほどの、或いは、糠を好むところの、ごく小型の飛翔出来る昆虫類を指しているとしてよからう。その代表が、通称「浮塵子」、イネの深刻な害虫となる昆虫群である。ウィキペディアの「ウンカ」によれば、カメムシ目ヨコバイ亜目 Homoptera の一部のグループで、アブラムシ・キジラミ・カイガラムシ・セミ類を除いた、成虫の体長が五ミリメートルほどの種群を指す。『そのような範疇の昆虫の』、『いわば』、『典型』的な『一つがウンカ』類『であるため、この仲間には』和名の一部に『ウンカの名を持つ分類群が非常に多い』。但し、『ウンカ』という標準和名を持つ生物はいない』とある、彼らである。『若徒』軽い軽蔑の意を込めて言うところの「手合」の詠りを当て訓したもの。若造連中。青二才ども。」

ほれ、のろのろと此方さ寄つて来るだ。あの、さきへ立つて、丸太棒をついた、それ手拭をだらりと首へかけた、逞い男でがす。奴が、女臈の幽霊でねえか。出たツと、また髯どのが叫ぶと、蜻蛉がひらりと動くと、くわつと二つ、灸のやうな炎が立つ。冷い火を汗に浴びると、うら山おろしの風さ眞黒に、どつと來た、煙の中を、目が眩んで遁げたでござえますでの。……それがすもの、ご新姐、お客様。」

「それぢや、私たち差出た事は、叱言なしに済むんだね。」

「ほつてもねえ、いゝ人扶けて下せえましたよ。時に、はい、和尚様歸つて、逢はつせえても、萬々沙汰なしに頼みますだ。」

其處へ、丸太棒が、のつそり來た。

「おぢい、もういゝか、大丈夫かよ。」

「うむ、見せえ、大智識さ五十年の香染の袈裟より利益があつての、その、嫁菜の縮緬の裡で、幽霊はもう消滅だ。」

「幽霊も大袈裟だがよ、悪く、蜻蛉に崇られると、瘡を病むといふから可恐えです。縄をかけたら、また崇つて出やしねえかな。」

と下精髯の布子が、ぶつぶついつた。「やぶちゃん注…「蜻蛉に崇られると、瘡を病む」「日文研」の「怪異・妖怪伝承データベース」の「死霊蜻蛉」相当のページに、井花伊左衛門氏の論考「各地の民間療法―滋賀県高島郡西庄村―」（『旅と伝説』（第八卷第十二号・通巻第九十六号・昭和一〇（一九三五）年十二月三元社発行）に、『瘧は死霊の祟りとも、蜻蛉を殺した罰だともいわれる。夏ごろに出る黒い蜻蛉をさしている』とあるので、ここで言うのは既注の「幽霊蜻蛉」、クロトンボである。」

「然ういふ口で、何で包むもの持つて来ねえ。糸塚、女蔭様、素で括つたお祟りだ、これ、敷松葉の數寄屋の庭の牡丹に雪圍ひをすと思へさ。」

「よし、おれが行く。」

と、冬の麥稈帽が出ようとする。

「あゝ、一寸。」

袖を開いて、お米が留めて、

「そのまゝ、その上からお結へなさいな。」

不精髯が――何處か昔の提灯屋に似て居たが、

「このまゝでかね、勿體至極もねえ。」

「かまひませんわ。」

「構はねえたつて。これ、縛るとなると。」

「うつくしいお方が、見てる前で、むざとなあ。」

麥藁と、不精髯が目を見合つて、半ば呟くが如くにいふ。

「いゝんですよ、構ひませんから。」

この時、丸太棒が鐵のやうに見えた。ぶるぶると腕に力の漲つた逞しいのが、

「よし、石も婉軟だらう。きれいなご新姐を抱くと思へ。」

といふまゝに、頸の手拭が眞額でピンと反ると、棒をハタと投げ、づかと諸手を墓にか

けた。袖の撓ふを胸へ取つた、前抱きにぬつと立ち、腰を張つて土手を下りた。此の方が掛り勝手がいいらしい。巖路へ踏みはだかるやうに足を擴げ、タタと總身に動搖を加れて、大きな蟹が龍宮の女房を胸に抱いて逆落しの瀧に乘るやうに、づづづづと下りて行く。

「えらいぞ、權太、怪我をするな。」

と、髻が小走りに、土手の方から後へ下りる。

「俺だつて、出来ねえ事はなかつたい、遠慮をした、えい、誰に。」

と、お米を見返つて、ニヤリとして、麥藁が後に續いた。

「頓生菩提。……小川へ流すか、燃しますべい。」

さういつて久助が、掻き集めた繩の屑を、一束ねに握つて腰を擡げた時は、三人はもう木戸を出て見えなかつたのである。

「久……爺や、爺やさん、羽織はね。式臺へはふり込んで置いて可いんですよ。」

この羽織が、黒塗の華頭窓に掛つて居て、其の窓際の机に向つて、お米は細りと坐つて居た。冬の日は釣瓶おとしといふより、梢の熟柿を礫に打つて、もう暮れて、客殿の廣い疊が皆暗い。「やぶちやん注…「華頭窓」「花頭窓」「火頭窓」とも書く。中国より禪宗寺院建築とともに伝わつたもので、上部が尖頭のアーチ状となつて下方の左右が鐘のようにやや開いた形を成す、寺院によく見かける、あれである。」

こんなにも、清らかなものかと思ふ、お米の頸を差覗くやうにしながら、盆に澁茶は出したが、火を置かぬ火鉢越しに且の机の上の提灯を視た。

（——この、提灯が出ないと、ご迷惑でも話が濟まない——）

信仰に頒布する、當山、本尊のお札を捧げた三寶を傍に、硯箱を控へて、硯の朱の方に筆を染めつつ、お米は提灯に瞳を凝らして、眉を描くやうに染めて居る。

「——屹と思ひついた、初路さんの絲塚に手向けて歸らう。赤蜻蛉——尾を銜へたのを是非頼む。塗師屋さんの内儀でも、女學校の出ぢやないか。繪といふと面倒だから圖畫で行くのさ。紅を引いて、二つならべれば、羽子の羽でもいい。胡蘿蔔を殲に松葉をさしても、形は似ます。指で挟んだ唐辛子でも構はない。——」

と、たそがれの立籠めて一際漆のやうな板敷を、お米の白い足袋の傳ふ時、唆かして口説いた。北辰妙見菩薩を拜んで、客殿へ退く間であつたが。「やぶちやん注…「北辰妙見菩薩」

北極星又は北斗七星を神格化した仏教の天部の一つ。[ウィキペディアの「妙見菩薩」](#)によれば、『妙見信仰は、インドで発祥した菩薩信仰が、中国で道教の北極星・北斗七星信仰と習合し、仏教の天部の一つとして日本に伝来したものである』とあり、『日蓮も重んじた』ことから、『妙見菩薩は日蓮宗寺院に祀られることが多い』とあるので、モデルである蓮昌寺に同菩薩が祀られてあっても違和感はない。」

水をたつぷりと注して、一寸口で吸つて、苔の唇をぼつとり黒く、八枚の羽を薄墨で、しかし丹念にあしらつた。瀬戸の水入が澁のついた鯉だつたのは、詠へたやうである。

「出来た、見事々々。お米坊、机に然うやつた處は、赤繪の紫式部だね。」「やぶちゃん

注…**「赤繪」**原義は赤色を主に使った上絵付けを施した陶磁器の一種。ガラス質の上絵具（赤色の他に緑・黄・紫・青色も用いる）で文様を描いたもの。中国では宋代に始まって、元・明以降に発達し、「五彩」とも呼ばれる。日本では

「古赤繪」・「万暦赤繪」・「天啓赤繪」・「呉須赤繪」などが茶人たちに愛好された。但し、この場合、紋様ではなく、具体な人物を配した作画対象であるから、幕末から明治頃の錦絵のうちに、鉱物性染料を用いた赤色の目立つ色摺りの濃い、ややどぎつい作品を指していよう。そうでこそ、以下の「**思はず失言を詫つ**」が生きてくる。則ち、目の前の

茶碗のそれが真正の「赤繪」の茶碗だったので、自分がおちゃらけて言つたそれが、いかにも下卑た感じになつてしまつたことから、慌てたのであると読める。なお、以下のブレ・コードの流れを澁ませたくないのに、ここに注するが、以下の「**準藤原女史**」というのは、紫式部の出自が藤原北家良門流の藤原為時の娘であり、母も同門流の藤原為信の娘であることに拠つて洒落たものである。」

「知らない、おつかさんにいひつけて叱らせてあげるから。」

「失禮。」

と、茶碗が、また、赤繪だつたので、思はず失言を詫つ、準藤原女史に介添してお掛け申す……羽織を取入れたが、窓あかりに、

「これは、大分うらに青苔がついた。悪いなあ。たゝんで持つか。」

と、持つたのに、それにお米が手を添へて、

「着ますわ。」

「きられるかい、墓のを、其のまゝ。」

「おかはいさうな方なのですもの、これ、葱摺ですよ。」

その優しさに、思はず胸がときめいて。

「肩を此方へ。」

「まあ、をぢさん。」

「おつかさんの名代だ、娘に着せるのに仔細ない。」

「はい、……どうぞ。」

くると向きかはると、思ひがけず、辻町の胸にヒヤリと髪をつけたのである。

「私、こひしい、おつかさん。」

前刻から――辻町は、演藝、映畫、そんなものの樂屋に縁がある――ほんの少々だけれども、これは筋にして稼げると、潜かに悪心の萌したのが、この時、色も、慾も何にもない、しみじみと、いとして涙ぐんだ。

「へい。お待遠でござりました。」

片手に蠟燭を、ちらちら、片手に少しばかり火を入れた十能を持つて、婆さんが庫裏から出た。

「糸塚さんへ置いて行きます、あとで氣をつけて下さいましよ、烏が火を銜へるといひますから。」

お米も、式臺へもうかゝつた。

「へい、もう、刻限で、危氣はござりましねえ、嘴太烏も、嘴細烏も、千羽ヶ淵の森へ行んで寢ました。」

大城下は、目の下に、町の燈は、柳にともれ、川に流るゝ。磴を下へ、谷の暗いやうに下りた。場末の五燈はまだ來ない。

あきなひ歸りの豆腐屋が、ぶつかるやうに、ハタと留まつた時、

「あれ、蜻蛉が。」

お米が膝をついて、手を合せた。

あの墓石を寄せかけた、塚の絲柵の柄にかけて下山した、提灯が、山門へ出て、すこしづゝ高くなり、裏山の風一通り、赤蜻蛉が靜と動いて、女の影が……二人見えた。

「やぶちゃん注…以上のすこぶる印象的な映像で泉鏡花の畢生の作品は終わっている。

「**嘴太鳥**」はスズメ目カラス科カラス属ハシブトガラス *Corvus macrorhynchos*。私の

「**和漢三才圖會第四十三 林禽類 大觜鳥（はしぶと）**」（ハシブトガラス）を、

「**嘴細鳥**」はスズメ目カラス科カラス属ハシボソガラス *Corvus corone* で、同じく「**和漢三**

才圖會第四十三 林禽類 慈鳥（からす）」（ハシボソガラス）を参照されたいが、こ

こで鳥を示して、彼らが初路が入水した千羽ヶ淵を婆さんに語らせ、静かに読者を回帰させ、同時に因縁の円環の閉じて、鎮魂を字背で匂わせている手法は流石である。

なお、ここでお米が「**鳥が火を銜へるといひます**」と言うのは、事実である。**サイト**

「**J-CAST テレビウォッチ**」の二〇一三年十二月十七日の記事「**京都・伏見稲荷大社で放**

火？犯人は悪戯カラス！火の付いたロウソク持ち去り」を読みたいが、そこに、二日前の十五日に、伏見稲荷大社でボヤが発生したが、『火事の直前、参拝客から「火のついたロウソクをカラスがくわえて飛んでいった」という目撃情報が寄せられた。参道の周囲にある灯籠にもされているロウソクを持ち去ったらしいのだ』とあり、鳥類学者で『慶応大学の樋口広芳特任教授』によれば、『カラスはロウソクが大好きなんです。ロウソクに含まれている油脂分が好きなんですね。ベーコン、焼きそば、マヨネーズ、肉片とかも好きなんです。ロウソクも好きなんです』とあり、『火を怖がることはないのか』という質問に対しても、『まったく怖がらないです。信じ難いことですが、場合によると、ロウソクに火がついて根元が溶けて熱い状態になっているのをなめるんです。熱さも炎ものともしません』と述べておられる。

さて。最後に、本篇に出る実際の「**赤蜻蛉**」について博物学的に種同定をする。**八月の盃蘭盆の頃から出現して、ロケーションの時制である十一月中・下旬まで群飛する赤い蜻蛉が必要条件である。**

まず、本篇の赤蜻蛉には霊のイメージが必然的に附帯しているところからは、私たちは直ちに、八月旧盆の頃から急に見かけることが多くなるそれは、民俗社会では古くから「**精霊蜻蛉**」（本篇でも第「五」章の前半に「**精霊蜻蛉**」と出る）と呼んで、「採ってはならない」と禁忌する地方もあるそれを想起する。而して、辞書類やトンボ愛好家の記載等を参看すると、「しよりょうとんぼ」は、圧倒的に、

有翅昆虫亜綱蜻蛉（トンボ）目 Ephemeroptera 亜目 Anisoptera 下目 トンボ上科 トンボ科 ハネビロ

トンボ亜科ハネビロトンボ族ウスバキトンボ属ウスバキトンボ *Pantala flavescens*

を指すことが多い、と記されてある（一つ、小学館「日本国語大辞典」ではウスバキトンボの他に『キトンボなど』として、

トンボ科アカネ亜科アカネ属キトンボ *Sympetrum croceolum*

と記す）。本種が「精霊蜻蛉」と呼ばれる理由については「[図鑑.net モバイルブログ](#)」の松

沢千鶴氏の「[精霊【しょうりょう】トンボとはどんなトンボ？](#)」に詳しい。そこに、『八月のお盆の頃から、急にトンボを見かけるようにな』る『それは、俗に精霊トンボと呼ばれるトンボでしょう。精霊【しょうりょう】とは、仏教用語で、死者の霊のことです。言い伝えでは、「死者の霊が、トンボに姿を変えたもの」などとされます。ちょうどお盆の頃に現われるためですね』とされ、『精霊トンボというのは、正式な種名ではありません。地方により、この名で呼ばれる種が違います。ウスバキトンボという種が、精霊トンボと呼ばれることが多いですね』とあり、『日本の多くの地方で、ウスバキトンボがお盆の頃に現われます。なぜでしょう？ その理由は、ウスバキトンボの生態にあります』。『ウスバキトンボには、三つの特徴があります。寒さに弱いこと、飛翔能力が高いこと、成長が速いことです。これらの特徴が、ウスバキトンボを精霊トンボにしています』。『ウスバキトンボは、日本の大部分の地方では、越冬できません。寒さに弱いからです。卵も幼虫も成虫も、みな死に絶えてしまいます。それなら、どうして毎年、日本にウスバキトンボが現われるのか、不思議ですね。この謎を解く鍵が、飛翔能力の高さと、成長の速さです』。『ウスバキトンボは、あまりはばたかずに、風に乗って飛ぶのがうまいです。つまり、体力を消耗しないで、長い距離を飛ぶことができます。冬、ウスバキトンボが死に絶えた地方でも、暖かくなれば、より暖かい地方から飛んできます』。『加えて、ウスバキトンボは成長が速いです。成虫が産んだ卵は、どんどん育ちます。すぐ成虫になって、また遠くまで飛びます。こうして、暖かくなるにつれ、ウスバキトンボは北上します。桜前線みたいですね。その「トンボ前線」が行き着くのが、多くの地方で、ちょうどお盆の頃なのです』。『ウスバキトンボは、世界一分布が広いトンボといわれます。前記の特徴のおかげですね。おそらく、世界一平凡なトンボです。なのに、生態に謎が多いです。日本に来る個体が、正確にはどこから来るのかも不明です』とあった。しかし乍ら、ウスバキトンボは、

文字通り、「薄羽黄蜻蛉」で、[ウィキペディアの「ウスバキトンボ」](#)によれば、『翅は薄く透明で、体のわりに大きい。全身が淡黄褐色で、腹部の背中側に黒い縦線があり、それを横切って細い横しまが多数走る。また、成熟したオス成虫は背中側にやや赤みがかかるものもいる』とあり、群成して飛ぶのが総て赤みを持った個体群というのは、ちょっと現実離れしているように思われる。そして、致命的なのは、こちらの図鑑 (PDF) の解説で、『低温に弱く10月中旬には死に絶える』とあることで、本時制と合わないことが判る。本種を「赤蜻蛉」と呼ぶ地方も、事実、あるようだが、多くの画像も見たが、私は彼らを「赤蜻蛉」とは到底呼ばないし、「赤い」「群れ」で飛ぶ、及び、十一月中・下旬の条件に合わないので、本種は候補から外れる。

寧ろ、「日本国語大辞典」の上げるキトンボの方は、[蜻蛉学会会員「カフェトンボ」氏のサイト「トンボフィールド観察記」](#)の、[キトンボのページ](#)によれば、『12月初めころまで見られ』るとされ、写真を見ても「赤蜻蛉」らしいので、本種は候補となり得るかと思われる。

一方、私が通常、「赤蜻蛉」と認識する種は、あきあかね「秋茜」、

アカネ亜科アカネ属アキアカネ*Sympetrum frequens*

である。[ウィキペディアの「アキアカネ」](#)によれば、本種は『俗に「赤とんぼ」と呼ばれ、狭義にはこの種だけを赤とんぼと呼ぶことがある』とあり、『オスは腹部第Ⅱ節の下部に副性器（Ⅱ次生殖器）があり、成熟すると腹部が赤くなる』。『メスは腹部が淡褐色のものと背面が赤いものがある』。『顔面はオスが橙褐色で、メスが黄褐色』。『オスは成熟しても頭部と腹部は赤くならない』とあり、さらに『成虫は二月まで見られ、中には12月上旬まで生き延びるものもいる』とも記されており、条件を完全に満たす。個体画像は、[素晴らしいトンボ図鑑であるサイト「神戸のトンボ」](#)の、[アキアカネのページ](#)を見られたい。

また、近縁種の「夏茜」、

アカネ属ナツアカネ*Sympetrum darwinianum*

もあり、[ウィキペディアの「ナツアカネ」](#)によれば、本種は『成熟した雄は全身が赤化し、雌も腹部背面が赤化する個体が多い』とし、さらに『アキアカネほど顕著ではないが、よく集団で移動し、他種と混ざって観察されることも多い。小規模な移動を幾度も繰り返す

習性があり、群れが去った後は一頭も見つからないこともある』とあった。また、「所沢市」公式ページ内の「[ふれあいの里だより](#)」の「夏の赤とんぼナツアカネ【ふれあいの里だより（令和元年8月号）】」によれば、『成虫は6月中旬頃から12月上旬ころまで見られるとあって、先のサイト「神戸のトンボ」のナツアカネのページにも（写真豊富で必見）、『秋になると真っ赤に色づいてきて、遅い個体ですと12月まで見られます。メスはアキアカネと同じく腹部背面が赤いタイプが多いのですが、稀に赤くならない褐色型も存在するそうです』とあって、やはり同じく条件に完全に合致する。

以上から、私はアキアカネ及びナツアカネを最有力候補とし、第二候補としてキトンボとしておく。

なお、既に文中の「蜻蛉とんぼに崇たられると、瘡おこりを病やむ」の注で示した民間伝承以外には、近世の怪奇談で、明確な「とんぼ」の「おぼけ」や「妖怪」というのは私の蒐集範囲の中でも見当たらず、記憶にもない。

*

さて。本篇が泉鏡花の確信犯の「白鳥の歌」であったことは、エンディングで、『辻町つじまちは、演藝えんげい、映畫えいぐわ、そんなものの樂屋がくやに縁えんがある――ほんの少々せうせうだけでも、これは筋すぢにして稼かせげると、潜ひそかに悪心あくしんの萌もしたのが、この時とき、色いろも、慾よくも何なんにもない、しみじみと、いとして涙なみだぐんだ』と記すことから、これ、明白であると言えよう。

*

而して、この「蜻蛉のおぼけ」は――本邦の唯一真正なる幻想文学者であった鏡花の――この世への置き土産代りの、異界からの使者としての霊的な蜻蛉でもあったのである
う……」